

歴史篇

一、阿萬ノ由来

阿萬ノ名稱ト由来ト海人

阿萬郷ノ区域ハ元頗ル廣汎ニシテ、現今ノ阿萬町ハ勿論、下灘村上灘村由良町及ビ紀伊ノ加太町ニ亘レル狹長ナル地方ヲ占メタルモノナリキ。而シテ阿萬ノ名稱ノ由来スル所又故アリ。昔数多ノ海人元ノ阿萬郷ニ住シ應仁天皇ノ御代ニ海部（アマベ）ト定メラレ盛ニ海産物ノ採取ニ從事セシガ故ニ自ラソノ名ヲ得ルニ至レリ。是等数多ノ海人ハ上古ニ於テハコノ海産物ヲ貢物トセシモノナリトイフ。

靈異記ニ阿萬ノ海人ノ獲得物ハソレゾレ朝廷ノ御調ニ奉ラレシ事又現塩屋組（昔塩屋村トイヘリ）ニ昔塩ヲ焼キ居タ事等靈異記に見エタリ。

昔難波ノ謡ニ「ユルスユエニヤ中ニイヤマシニハコブミツギノ干箱ノ王ヲ奉ル」トアリ此ノ事ハ即チ淡路ノ海部ノ献上セラレシ事ヲ言ヒタルナリ。應仁天皇ノ崩御アリ稚郎子皇子、大鷦鷯尊互ニ御讓位アリテ未ダ即位ノ式ヲ擧ゲラレザル時ニ一人ノ海人アリ鮮魚ヲ持チ皇太子ニ奉ラント欲シテ飯路ニ到リ稚郎子皇子ニ捧グ皇子自ラ皇太子ニアラズト稱シテ受け給ハズ即チ難波ニ到リテ大鷦鷯尊ニ捧グ尊モ亦受け給ハズカクスル中ニ彼ノ魚腐敗シテ用ヲナサズ。此ニ於テ彼ノ海人ハ魚ヲ棄テ、號叫セリト言フコノ海人タルヤ三原ノ海人ナルベシ以テ是等ノ海人等直接ニ天皇ニ仕へ奉リ殊ニ親シミノ深カリシヲ知ルベク、當時天皇トコノ海人等ノ

間ニハ此ノ海人ヲ支配統治スル官公吏ノナカリシモノナラン。
貞觀年中ニ早クモ石清水八幡宮ヲ勸請申シテ此ノ地ニ應神天皇ヲ奉祀セシモ亦故ナキニ非ラザルナリ。

又日本紀卷十一仁徳天皇記ニ曰ク

游宇宿彌啓ニ大鷦鷯尊一日臣所在屯田者大中彦皇子距不レ冷治大鷦鷯尊問ニ倭直祖磨一日倭屯田者元謂ニ山宇地ニ是如何對日臣之不レ知唯臣弟吾子籠知也適ニ此時一吾子籠遣ニ韓國一而未レ還爰大鷦鷯尊謂ニ游宇一日爾躬往ニ於韓國一以喚ニ吾子籠一其兼ニ日夜而

急往乃差ニ淡路之海人八十一為ニ水手一干韓國

コノ八十人ノ海人タルヤ淡路ノ海人ナルベシ蓋シ應神天皇記ニ淡路御原ノ海人八十人アリテ他ニ海人見エザレバナリ。

一 阿萬ノ發展ト史実

阿萬ノ住民ハ蓋シ悠遠ナル時代ニ於テ東北方ヨリ次第ニ内部ニ移住シ来リシモノノ如ク文化ノ中心モ亦一時現東組ノ奥ニアリシ事モアルベク漸次内部ニ移リシモノナルベシ。

ソノ後源義家ノ裔孫某今ノ上組ノ地ニ来リ榎本氏ト稱スルアリ、又吹上ニハ安部ノ貞任ノ裔孫阿波ノ地ヨリ移住セシアリ、源平ノ時安摩六郎宗範居城ヲ塩屋ニ築キシアリ。

寛元年中平兼友阿万北部山頂ノ城ニ城主トシテ後河内(ガウ)氏ヲ稱シソノ後郷丹後ノ守重朝在城ナシタルアリ、或ハ貞和五年西組榎本氏天正六年大土井ノ城主安宅氏及之ト前後シテ

築前ヨリ来リテ淡路炬口ニ住ミシ藤平氏ノ来リ住スルアリ、漸次戸口繁栄シテ現今ニ到リ村ヨリ町ニ進展シ現本町ニ籍ヲ有スルモノ九三三戸五、五一四人、本籍人口六、六三一人ノ多キニ到ル。而シテ或ハ他郷ニ出テ進ムモノ或ハ異邦ニ出稼スルモノ益々多カラントスルニ至レリ。

阿万ハ昔ヨリ武人多ク住セシ所ト聞ユ。太平記ニモ阿万志知ノ人々杆トアリテ阿万六郎等モ此ノ地ニ住セシモノナルベシ。

太平記卷十七二曰ク

延元元年官軍山門ニアリ阿波淡路ノ兵阿万志知小笠原ノ人々三千餘騎官軍ニ加ハリシカバ諸郷大イニ喜ベリトアリ。

又太平記卷二十二ニ

曆應三年四月脇屋義助勤ヲ奉ジテ伊豫ニ下向シ四國西國ノ大将トナル義助吉野ヲ発シテ伊豫ノ國ニ到ル此ノ時熊野別當湛譽等兵船ヲ調べテ淡路武嶋ニ遣レリ安間志知小笠原ノ一族城ヲ武嶋ニ構ヘ居タリシガ又兵船三百余艘ヲ調ヘテ義助ヲ備前児島ニ送ルトアリ

平家物語ニ阿波ノ國ノ住人安摩六郎忠景コレモ平家ニ背キテ源氏ニ心ヲ通ジケルガ大船二艘ニ兵糧米ヲ積ミ武具ヲ入レ都ヲサシテ上リケルヲ能登ノ守福原ニテ此ノ由ヲ聞キ給ヒテ追ハレケレバ安摩六郎叫ハジトヤ思ヒケン和泉國吹飯浦ニ楯籠ル、紀州國住人園部兵東忠康ト一ツニナリテ城ヲ構ヘテ待ツニ能登守押寄セテ攻給ヘバ安摩ノ國身カラガラ逃レテ京へ上ルヨ

シ見エタリ。源平盛衰記録倉実記等ニハ淡路ノ國ハ安摩六郎宗益トアリ園部兵東ハ重茂ニ作レリ。其ノ他古壘アリテ合戦ノ跡歴々タレバ武人ノ多ク居タリシ事モ亦事実ナルベシ。

一 郷殿城址

郷殿城址ハ町ノ北部山頂ニアリ。直立十二、三間アリタリト言フ。又矢倉台三段アリ。上ノ丸（東西十三間南北七間）中ノ丸（東西五間南北四間）下ノ段（東西七間南北五間）アリタリ、然レ共ソノ宮構セシ時代明ナラズ。

昔八木屋形細川ノ氏族此ノ城郭ニヨリ統治セシガ永亨年中沼島城主梶原越前守俊景ノ為ニ襲ハレ城ヲ出デ福良ニ奔リ討レ滅亡シタリト。

細川彦四郎 — 丹後守 — 備前ノ守 — 丹後ノ守（世世郷殿ヲ稱ス）

（尚常磐草ニ曰ク按スルニ養宜屋形成春モ始メハ彦四郎ト稱スト系図ニ見エタリ阿万モ亦其ノ氏族ナルベシト）

又言フ城主平兼友寛年中（寛元ハ八十七代御嵯峨天皇年号ニシテ將軍ハ源頼經治世ナリ）ニ居タリト。其ノ後郷丹後ノ守重朝在城ス。郷ハ即チ河内（ゴウ）ニシテ現今上組川上ニ河内谷ト言フ所アリ此ノ地河内谷ニアル葛原山正福寺（薬師）ノ蓮台ニ兼友ノ銘アルコトハ正福寺ノ條ニ誌ス。傳説ニ言フ郷丹後ノ守重朝ハ細川氏ニシテ沼島梶原氏ヲヒソカニ襲ヒ攻メント計画シ居タリ。然ルニコノ計アルヲ梶原ニ告ゲシ者アリタレバ梶原直チニ寄せ来タリ阿万城ヲ攻メタリ。郷殿戦破レテ利アラズ家ノ子郎党皆八方ニ分散ス。郷殿単騎ニテ遁レタリ。

阿万上組ニ河内トイフ所アリ僧坊十二区アリテコ、ニ丹後ノ守シバシ身ヲ隠シテ難ヲ遁レタリ。葛原山正福寺ニ了海トイフ僧アリテ丹後守ヲソノ後カクマヒ居タリシナリ（葛原山正福寺ハ郷殿ノ菩提寺ナリト言フ）

然レドモ梶原ノ詮議キビシクシテ隠レ居ル事至難トナリシカバ了海ハ郷殿ニ告ゲテ曰ク「ココハ敵地ニ近クシテ止リ難シ福良ニ遁レ去ラバ宜シカラント勸メタリ。

丹後ノ守諾シテ福良ニ往ケリ（暗キ夜ヲ選ビ供ヲモ連レズ單身福良ニ落チ逃レタリト言フ）ソノ出立ニ際シ僧了海ト共ニツキヌ名残ヲ惜シミタリト言フ）

梶原ハ丹後ノ守ノ福良ニ落チシ事ヲ知ルニアタリ陸ノ軍勢ヲ大急行セシメ、海ノ軍勢ニハ八丁櫓ヲ仕立テ海陸路ヨリ大イニ攻メ立テタリ。

福良ニテハ丹後ノ守事ノ急ナルヲ知リテ日頃頼ミニシ居タリシ當人某ノ所ニ身ヲ寄せタリ。然ルニ梶原方ノ軍勢郷殿ヲ求メ功ヲ立テントテ搜索急ナリ。コ、ニ福良ノ浦人某梶原ヨリ出

ズ賞金ヲ望ミテ郷殿ノ隠レ居ル所ヲ告ゲルニ至リヌ。

丹後ノ守モ最早難ヲ遁ルアタハズ終ニ岨ノ上ニ於テ自刃シタリ。臨終ノ時郷殿ハ福良ノ里人ノ頼ミ甲斐ナキ事ヲ恨ミタリト言フ。

其ノ年ヨリ福良ノ里ニ疫病甚ダシク流行シタリ。是即チ丹後ノ守ノ亡靈ノ祟ナラントテ祠ヲ作リテ鎮祭シタリ。福良公館ノ後山郷殿ノ祠是也。

沼島梶原氏ハ三好ニ服從セシヲモツテ此ノ争起リセシモノナラント傳フ。古城址上ノ丸ニ供

養塔アリ高サ一米半許リニシテ碑文ニ

奉供養南無觀世音大菩薩敬白元禄十六癸未年

十一月十八日城主郷丹後頭大菩提也 施主上本庄中庄屋榎本吉左衛門舎之

トアリ蓋シ郷丹後ノ守滅亡後村民其ノ遺徳ヲ慕ヒテ建テシモノトス。山ノ東麓ヲ城ノ下トイヒテ清キ川流ルソノ川ニ農田ニ使用スル井手アリ、コノホシ石ハ皆巨大ナルモノニシテ最も大ナルモノ千貫ヲ越ユルモノアリ之皆昔ノ城ニ使用セシ石ナリト言フ。

ココニハ又當町名所ノ一ツニテ城ノ下ほたるアリコノほたるハ皆普通ノ螢ヨリ大ニシテ初夏ノ候老モ若キモ團羽片手ノ螢狩昔ノ今ニ飛ビ交フ螢ヲ見テハソゾロニアリシ昔ノ事ドモ思ヒ出サル、ナリ。

又南麓ニ苔蒸ス古井戸アリ郷ノ井ト稱シテ昔郷家ノ使用セシ井戸ナルベシ。又此ノ辺ニ土器其ノ他刀劍ノ類掘リ出サル、ナリ。先年鎧ノ下等ニ着スルモノ（クサリ・カタビラ）ノ掘リ出サレタリ。城址ノ南ノ方ニ北門ト言フ所ニ古塚アリ之ハ郷殿ノ奥方北ノ内ノ墓ナリト傳フ。又山ノ東約四百米ノ所ニ方ノ鼻ト言ヘル所アリココニ長刀ノ石築ノ跡及中蹄ノ蹟ノ存セル大ナル石アリ。コレハ郷殿ノ戦利アラズ城ヲ遁ル、時牛ニ跨リ山頂ヨリ飛ビ下リタルソノ時下ニアリシ石ニ牛ノ蹄ノ蹟ト持チタル長刀ノ石築ノ跡トガ残リシトイフ。ソノ他山頂ニ武者屯西方ニ馬場、武藝道場及全所守護神大將軍神社アリ。現今頂上ニモ老松數十本枝ヲ交ヘ大將神社ノ老松ト共ニソゞロニ當時ヲ物語ルモノノ如シ。

一 塩屋古城址

小山ノ西ノ端ニシテ二段程ノ平丘ヲ言フ。源平ノ時安摩六郎宗益居城スト言フ。又或書ニ言フ。源平ノ時安摩六郎忠景籠城シテ能登守教経ノ為ニ城ヲ攻メラレ遂ニ開キテ泉州ニ逃ルト言フ。尚古老ノ言ニヨレバ先年山頂ニ縦五尺許ソ掘穴アリテソノ中ヨリ白石、紅ガラス及ビ鉄ノ朽チタルモノ等多ク出デタリト言フ今其ノ穴ハ埋レテナシ。

一 庄屋ト石高

法庵様（蜂須賀候先祖ナリ）當淡路ヲ御配置アリタル時寛永四年御檢地アリテ以後阿万郷村ニ庄屋仰セツケラレタリ。

庄屋ノ配下村内ニ種々物事ヲ傳ヘルニハ人ヲモツテ村ノ辻々ニ立チテ大声ニテ呼バシメタリ。コレヲ触使ト言フ。又辻々ニテ大声ニテ呼ブコトヲ犬聲ヲ立テルト言フ。村民等ハコノ犬聲ヲ聞ケバ何事ヲナシ居ルトモ直チニコノ言葉ニ從ヒタリト言ヘリ。又村々ニ御蔵屋敷トテ殿倉（トノクラ）ノ建チ居リシ所アリ。殿倉トハ年貢米ヲ集ムル所ナリ。ココヘ地頭ヨリ命ヲ受ケシ役人來リテ年貢米ヲ徴収シタリトイフ。始メハ七公三民トテ收穫ノ七分ハ上へ上納シ余リ三分ハ自己ノ所得トスルナリ。ソレヨリ六公四民トナリ更ニ三公七民ト言フガ如クナリシトイフ。

而シテソノ七公三民ノ苛酷ノ上納モ少シナリトモ遲滯セルモノアル時ハ水牢ヲコシラヘ置キテ入レタリト言フ。牢ノ跡ハ木戸口ニシテ今木戸ノ木ト言フ。右牢場ハ下本庄村（下組）ノ

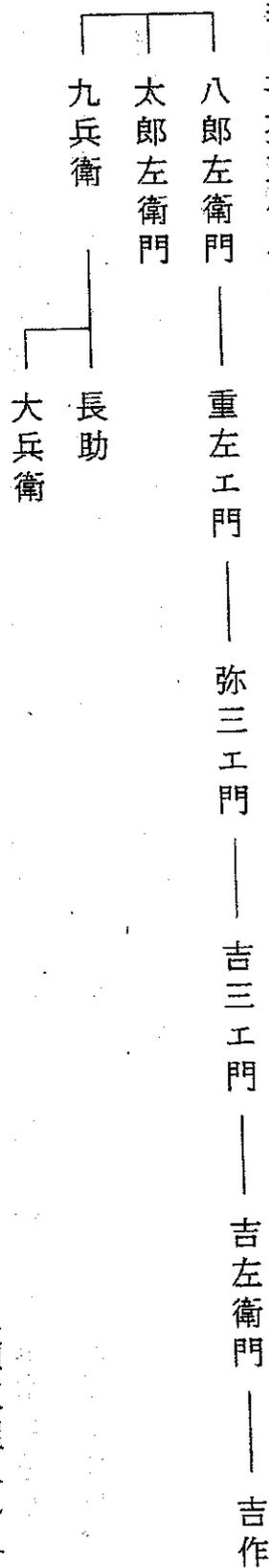
傍爾（ホーズ）ノ内ニアリ。

本庄村政所八郎右エ門子重左衛門儀ハ父八郎右エ門マデ往古ヨリ總政所役相勤メシ由緒ニツキ庄屋組頭役ニ法庵様ヨリ仰セツケラレタリ。

右重左衛門ハ下灘ト又北阿万ト山論ニ及ビ牛ニ乘リテ出デ山ノ境ヲ定メタリ。（コレハ尚傳説ノ條ニ述ブ）其ノ身ハ足不具ニツキ御用先往来ハ馬及ビ牛又ハ杖ヲ赦サレタリ。

吹上村ハ寛永四年ニ庄屋仰セツケラレタリ。下村ハ寛永四年ニ西村東村ト分レテ並ニ庄屋仰セツケラレタリ。而シテ東村庄屋ハ重左衛門聳故假名遣ハシ榎本ヲ名乗ラシム。寛永十年ニ本庄村ヲ分チテ上本庄ト下本庄ト二ヶ村トナセリ。又新田三ヶ村ハ承應年中ニ村立テシ明曆年中ニ庄屋仰セツケラレタリ。

上本村庄屋ハ古ヨリ總政所役八郎左衛門ニ至ルマデ相務メタリ。八郎左衛門ノ子重左衛門ヨリ子孫五代ハ組頭ヲ勤メタリ。



松平淡路ノ守ノ先祖ノ當國ヲ領セシヨリ吉作迄五代庄屋役目傳ハル（蓋シ組頭庄屋ニシテ組頭役及ビ庄屋ヲ兼ネシモノトス）

組頭役ノ儀ハ重左エ門ノ子弥左エ門組頭役勤マリ難キニツキ御断リ申シ上ゲ伊賀野村庄屋長平(田村氏)ニ當分仰セツケラレ寛永十年ヨリ寛文六年迄相勤ム右弥左エ門ノ子吉左エ門ハ寛文六年ヨリ組頭役受取り相務メタリ。

吉左エ門ハ未進ノ米二十九石一斗アリシガ稻田九郎兵衛様ヨリ御見捨下サレシ旨郡奉行岩間半兵衛並ニ前野角兵衛ヨリ仰セ出ダサル。其ノ後又不世打チ續キテ二十九石一斗ノ未納米出来タリシガ國中ノ未進ト一緒ニ御見捨下サレタリ。

寛永四年故アリテ組頭役並ニ庄屋ヲ止メ河内ニ入りテ住ス。同年筒井村庄屋次左エ門ニ頭役仰セラレタリ。前記八郎左エ門弟ニ太郎左エ門及ビ九兵衛ノ三人兄弟ナリ。

九兵衛ノ子長助及ビ太兵衛アリ(前記系図)長助ハ下本庄村庄屋トナリテ江本ト稱シ太兵衛ハ徳島ニテ治メ方下代ニナリタリ。又彼ノ弥三右エ門ハ洲本町下代ニナリ江本ヲ稱ス。

以上ハ榎本兵次郎(現利男)氏所藏ノ古書ニ見エタルガ此ノ古書ノ前文失ヒテ傳ラズ。尚堅磐草ニ左ノ石高見ユ

阿万組十村

筒井村 (七百五十四石五斗 与頂田村氏)

阿万西村 (五百十石余 カ 藤本氏)

同 東組 (九百九十石 ゴウ 榎本氏)

同塩屋村 (千十五石余) 代々岡本氏 (黒田氏最後)

同吹上村 (二百八十石)

田村氏

上本庄村 (千百石)

代々 榎本氏

(最後阿万氏)

下本庄村 (五百四十石)

江本氏

伊賀野村 (九百七〇石余)

新田南村 (六百九十五石)

外 安田氏)

同 中村 (五百石余)

一 往古ノ山論 (山手ノ訴訟)

昔ヨリ天正十四年八月迄灘来川村ヨリ下山十三村ノ分ハ阿万村ノ傘下ニシテ萬事ノ役儀申シツケ帳面モ一書アリシガ未ダ山ノ境定マラズ天正十四年八月ヨリ脇坂中書様 (脇坂中務少輔安治) 御檢地アリテ阿萬及ビ灘ニ各々御代官ヲ附ケタリ。

ソレニツキ灘ノ人々ハ阿萬ノ人々ヲ灘ノ分領ヘ立入ラセマジク言ヒテ天正十五年ヨリ同十七年七月迄互ニ質ヲ取り替ヒ等種々トナセシ末灘ノ人々ハ書キ物ヲ以テ中書様ヘ申上ゲヌ。

ソノ時阿万ヨリマカリ出デ先年ノ筋目悉ク申上ゲタリ。ココニ於テ中書様ハ (阿万ノ者共ハ先年ノ筋目ニ立チ切り申スベシ、道ハ山手ヲツケ候ヘ) ト仰セ出サレ右ノ折紙ヲ下サル。コノ年ヨリ八石八斗ノ山手始マレリ。ソレ迄ハ阿万庄ニ山手トイフモノナカリキ。

然ルニ慶長八年ノ末下灘ノ分領ヘ立チ入ラセマジク言ヒテ土生村ノ惣五郎ト言フ者談ジ合ヒ (右ハ大日山マデナルニ拘ラズ灘ノ海平マデ阿万ヨリ切り取りテハ灘ノ堪忍マカリナラズト)

灘ノ大夫惣五郎合セテ四人洲本へ出デ御奉行御代官へ申上ゲヌ。

ソノ時阿万ヨリ出デ行キ洲本官坊ニテ御奉行本庄河内殿鷲市右衛門同ジク脇坂文清殿及ビ灘ノ御代官山本久左衛門殿同附役ノ御代官野田七郎兵衛殿五人御前ニテ御裁許ヲ受ケ右ノ折紙ヲ差出セシニ一問答ニテ阿万ノ勝トナレリ、惣五郎ハ灘ニ販リシガ中書様京ニ在シママニ付キ京へ上リテ御訴訟申上グベシト談ジ合シニ村々ノ人々ハトテモ叶ハジト言ヒ合ヒテ組ヲ退キタレバ惣五郎一人トナレリ、コ、ニ於テ惣五郎ハ聲ノ源七郎ヲ連レテ二人京へ上リ伴惣右エ門ヲ頼ミ色々訴ヘシカドモ叶ハズ、ココニ於テ愈々阿万ノ勝利トナレリ。

以上山手ニ関スル古書ニ依リココニ記ス

一 郷社龜岡八幡宮

社殿南向ニシテ亭保中ノ官記ニ方境ノ畝數四段二畝租税ヲ免除スト也。昔ノ十一ヶ村ノ産土神ニシテ即チ上本庄村（上組）下本庄村（下組）塩屋村（塩屋組中西組佐野組）吹上村（吹上組）阿万東村（東組）阿万西村（西組丸田）伊賀野村（北阿万伊賀野組）新田中村（北阿万村中組）新田南村（北阿万南組）新田北村（北阿万北組）筒井村（北阿万筒井村）別當神宮寺社僧清潮寺（現麿寺）万勝寺 廟官前川氏（本殿東ノ方ニ住ス） 明治四年七月四日郷社トナル、春秋ノ例祭ハ四月十五日及ビ九月十五日ナリ、建築物壯大ニシテ社殿幣殿拜殿神樂殿御輿舎社務所御供炊舎御寶物倉間馬大石桂大鳥居等備ラザルモノナク境内坪數一千六百十八坪五合アリ、而シテ當社ノ由緒最深シ。

一 郷社八幡神社由緒

所在地 兵庫縣淡路ノ國三原郡阿万町ノ内本庄字龜岡

社名 郷社八幡神社

祭神 應神天皇 呂陀和氣命（十六代天皇）

配祀

比咩大神

神宮皇后 息長帶比賣命（御母君）

仁徳天皇 大雀命（若君）

春日大神

橘 正延

一 事由

本社ノ儀ハ人皇八十五代後堀川天皇ノ御宇貞永元年八月朔日元阿万村ノ西組ナル龜ヶ岡ヨリ現地ヘ移轉サレソノ時萬勝寺ノ開祖明惠上人ノ結縁ニテ阿万古城主監物殿ノ創立ニヨリ擴大ナル社殿ノ構造社域ノ東端ニ本頭坊ヲ置キ社ノ南前ニ神宮寺ヲ附サル。元亨年間ニ淡路大夫判官殿ヨリ佛教百九拾壹卷に寄サレ永享年間ニ沼島住人梶原氏ヨリ紺紙金泥ノ佛經三部拾壹卷ヲ納メラレ寛永四年度ニ旧藩主蜂須賀家ヨリ社田一段七畝歩ヲ附サレ貞亨二年度ノ大修繕ノ際ニ肉料參拾挺ヲ下附サレタル事本町古記ニ見エタリ

一 年中行事

古来武將ノ住ミタル地ノ産土神ニ施行セラル、古式ハ風俗ノ所為ナラザル廉ハ所謂正月十五日仲秋祭十月十一日此ノ三度ノ奉幣式ノ所為ハ(串長五尺四寸)ハ鄭重ナル事淡路中他二比類ヲ見ズ、殊更仲秋ハ放生会ヲ行ヒタルガ之ヲ一變サレタル故ニ駒ノ古風現存ス。ソノ式ハ八月十三日午後ヨリ氏子ノ農馬一同海濱ニ出テ潮垢離ヲ搔キソレヨリ社頭ヘ牽キ入レテ十四日ハ競ヲ行ヒ十五日ハ乘馬五頭ニテ流鏑駉ヲ行フ、騎手ハ白衣ノ服ニ大刀ヲ佩ビ綾笠を被リ馬一頭ニ的三枚宛ヲ射流シ乘馬五頭ノ馳駉スル事計三十六度ニシテ式ノ始ト終ト當リ群馬ノ縋ヲ一度ニ解シ一時馬ノ自由ヲ與フル事世上ニ高名ナル放馬ノ祭礼古式ナリ。

ソノ他又頭式アリテ頭式ニ當リタルモノハ酒肴神餅ヲ氏子ニ呈ス。又氏子三才ニナレバ三ツ頭ヲ行フ。龜岡八幡宮ハソノ最初阿万浦ノ宮居ノ濱ニ御鎮座アリ。ソノ昔神功皇后三韓攻ノ御時御懷胎ニマシマセシ故加太粟島明神ニ御歸国ノ上御安産アラセ給ヘト祈誓ヲ懸ケ給ヒテ三韓ヘ御渡リアリ御功ナリテ御歸国ノ途筑前ノ國粕屋郡蚊田村ニテ御安産アラセラレ給ヒソノ所ヲ宇瀬村ト名付ケ給ヘリ

コレニヨリ粟島明神ヘ御禮詣デニ若宮八幡様御代参ニ立チ給ヘリ。

斯テ武内大臣若君ヲ守奉リ小舟ニ乘リ鳴門ヨリ御廻リ遊バサル、蓋シ時恰モ虜阪忍熊ニ王既ニ兵ヲ免餓野ニ構ヘテ待テルヲ聞コシ召サレシ故カクノ如ク舟ヲ南海ニ廻ラレシモノナリ、ソノ時阿万浦ノ沖ニ一夜御船ガカリアラセ給ヘリ

コレハ危険ナル鳴戸ノ海峽ヲ通過シテ更ニ塩崎（潮崎）ノ難所（昔此ノ所ハ大岩多く出テ最モ航行難所ナリシガ如シ）ヲ航行セントスルニ當リ先ズ宮居ノ海上ニ休養ヲトラレシモノナリ。

且阿万宮居ノ濱ハ白砂青松ノ海岸ニシテ誠ニ景勝ノ地ナレバ自然コ、ニ泊ラレシモノニシテ若宮様ノ鳴戸ヲ通過サレシ事ハ事実ナレバ宮居ノ海ニ一泊セラレシモ亦事実ナルベシ。

コノ縁ニヨリテ貞觀年中ニ御社ヲ建立シ八幡宮ヲ城州石清水八幡宮ヨリ勸請申シ奉リ一村ノ氏神トシテ敬ヒ奉レリ。ソノ若宮様ノ御泊申サレシ浜ハモトヨリ廣潤ニシテ白砂ノ沖ヘ二町バカリモ廣サハアリタルナリ。（現在生存セル九〇才ノ古老ノ話ニハ浜ニハ砂丘數多アリテ一抱ノ木生ヘ洩リタルコトヲ知ル。）

ヤガテ御宮ノ松繁リ榮ヘテ風景最モ宜シケレバ土俗之ヲ歌ヒテ曰ク「浜ヲ見ルナラ宮居ノ浜ヨイツモミヤ居ノ御座ル浜」ト言ヘリ（宮居トハ若宮様ノ居ラレタル御事ヲ傳ヘタルモノニシテ即チ浜ノ名稱ノ由来スル所ナリ。）

カクシテ元暦元年秋八月（安徳天皇ノ御代）大ナル高潮打チ上ゲテ白浜モ狹クナリ氏神ノ社（古跡浜八幡祠浜宮ト稱シテ今堤防上ニ存ス）ソノ難ヲ受ケテ海中深く没シタリ。

時ヲ経ズシテ辱クモ八幡宮ハ大亀ニ乗ラセ給ヒ又本ノ阿万ノ浦ニ御上リアラセ給フ。ソノ時大亀ノ歩ミシ路ハ大キナル窪トナリタリ。人コレヲ稱シテ氏神窪（ウヂガリボ）ト呼ブ（八

段歩程アリタリ。尚古老ノ言ニヨレバコノ時大龜ハ側ニアリシ大ナル松ノ本ニテ休ミタリト
言フ、而シテソノ由緒深キ松ノ木ハ現在ニテモ存在シ氏神窪ノ松ト呼ベリ。

是ニ於テ里人御社壇ヲ岡ノ上ニ築ク之ヲ龜岡八幡ト稱ス（古跡ノ祠岡上ニアリ氏神ノ森ト言
フ）又一説ニ言フ治承中流ニ浪人ニシテ藤原龜王ト言ヘルモノ内大臣ノ裔ニシテ八幡宮ヲ尊
信シ携フル所ノ一刀ヲ奉納シ自ラ神主職ヲ勤メシナリト言フ。故ニ俗二人之ヲ呼ビテ龜王之
八幡ト謂フナリトアリ。

ソレヨリ是ノ山ニ御宮ヲ構ヘ奉リ龜ヶ岡八幡宮トアガメ奉ル。

毎年六月晦日祭りニハ惣六人トテ二小工兩庄ヨリ六人ツツ（計十二人）出仕シ大ナル神ニシ
テ（穀皮）カケテソレヲ神輿ト拜シ奉リテ浜ニ御幸アレバ大龜モ浮キ出デ、ソノ御幸ヲ拜ミ
奉ルトナリ。之ハ幡宮ノ大龜ニ乘リテ陸ニ上リ給ヒシ縁ニヨルナリ。

（是等土人ノ傳説ハ海上御碇泊ヨリ浜ノ神社並ニ地変后一移轉ヲ偲バシム）寛喜四年彌宜某
ニ御神託アリ。コレニヨリ大檀那堅物阿万六郎平兼友ヨリノ御寄進ニ寄リテ廣大ナル御宮ヲ
龜岡山上本庄村松浦明神ノ御境内ニ造リ貞永元年壬辰八月朔謹ンデ神輿ヲ奉ジ以テ宮ヲ遷シ
奉ル庄内ノ惣氏神トアガメ奉ル今ノ社之ナリ。

コノ地嘗テ阿万氏築城シ松浦明神ヲ勸請シ以テ鎮守トナシタル所ナリ然シテ後松浦明神ヲ以
テ攝社トナス。

往古阿万村神事八十二人ヲ以テ之ヲ勤メ既ニ宮居ヲ本庄村ニ轉ジタル後モ亦社辺ノ東西ノ十

二家ソノ胤統今ニ之ニ任ズ

又永享八年沼島住人梶原平俊景ハ阿万八幡宮ヲ模シ去リテ祭ル依テ佛教若干卷ヲ寄捨シ武器ヲ加ヘタリ。

當八幡社ノ神主ハ前川氏ナリ彼ハソノ祖貞利（藤原氏ノ裔ト言フ）元和元年當社ノ神主トナリコレヨリ十代ニ現季アリ。ソノ系図左ノ如シ。

貞利——與宜——權利——眞貞——知宣——貞嘉——精春——磐夫——初名直宜——安城——季

又境内神社三社アリ松浦高良大明神ハ住吉大神及ビ武内大臣ヲ祭ルモノニシテ古城主安摩六郎土着ノ節之ヲ祭り鎮守トナセシガ中古八幡社建築ノ後攝社トナス（事前ニモ述ブ）

大地主神社ハ大穴貴神（大國主神）ヲ祭ルモノニシテ古代ヨリ當境内ニモタラシ来テ近傍屋内ヲ守護セル所ノ古キ神祠ナリ。

天満宮社ハ菅原大臣道眞ヲ祭レルモノニシテ昔武田太郎允有信ナルモノアリ筑前太宰府菅原神社廟ニ参籠スルコト一週間ソノ際模シ来タリテ既ニ自宅地内ニ鎮座セルニ近隣近郷ヨリ信徒ノ参拝スルモノ多カリシガ故ニ宮ニ請イテ爰ニ移轉シテ祭レルナリ。

コノ外二三宝荒神アリ往古ヨリ社ナクタダ岩ヲ立テ、祭りシガ八幡宮御移リ有リテヨリ社ヲ立テ、祭りタリソノ御神体タル岩ハ今モ後方ニアリト傳フルナリ。

一 建物（昭和十二年・現在ヨリ前ノ建物也）

本殿桁行四間半 梁式間殿内九坪宜昔

天正七年八月古造ヲ模シテ再建シタル巨大ノ社殿淡路國內他ニ無比トス

一 攝社

松浦神社 祭神二坐 中筒男命 高良玉○命

末社 三字皆板葺造り

祭神 大地主神 三尺五寸四面

伊勢大神 三尺 四面

菅原天神 四尺 四面

拝殿 桁七件三尺 梁四間 正保二酉年再興

御輿庫 桁三間 梁二間 宝曆三酉年十月再建

神樂殿 桁三間 梁三間 明治九年四月再建

社務所 桁六間 梁二間半 明治十三年八月再建

御供炊舎 桁六間 梁二間半 嘉永五年六月再建

随神門 桁三間 梁二間 文政年度再建

神馬舎 桁四間半 梁一間 明治三年創立

計 十二棟

境内地 第一種官有地 一千六百二十坪

但三境内前庭及左右後方共平地ニシテ中央隆起シ一小岡ヲナス。

ソノ状恰モ龜甲ノ首ヲ伸バスルガ如シ御供炊舎神馬舎ヲ除ク外諸建物皆此ノ岡上ニアリ、而シテソノ絶頂ニアルモノヲ本殿トス。

岡ノ左右及後方ハ四時松杉雜木鬱叢トシテ眞ニ神寂ビタリ南境ニ本庄川ノ溪流ヲ帶ビ四時ノ風景最モ佳ナリ。

永續基本財産建物等維持上ニ関シテハ田地七反七畝九步宅地一畝二十一坪合計七反九畝步此ノ所得ヲモツテ支持ス

一 寶物

華嚴經五拾七卷 大集經參千卷 涅槃經三十九卷 般若經三十一卷 日月才經二十

一卷 法ヶ經七卷 梵網經一卷 櫻珞木葉經二卷 像法決疑經壹卷 觀音普賢經

壹卷

以上拾部百九十一卷 壹函ニ入レ記シテ曰ク

元享四年甲子五月拾四日奉入之願主淡路大夫判官入道沙弥窓連ト有リ 法華經八卷 觀音

普賢經一卷 無量義經一卷 右三部紺紙金泥壹函ニ記シテ永享八年丙辰卯月奉寄捨阿万本

庄八幡宮 沼島住人梶原越前守平俊景ト又大般若經函ニ記シテ曰ク、宝徳二年庚午卯月願

主橘正時 藤原久長 梶田守長 梶田有実 梶田有傳トアリ

(以上經文八神佛御分ノ際神宮寺へ屬ス)

龜岡山典故錄一卷 寶曆拾五年別當房法雲作

龜岡山由緒記一卷 安政五年三原郡境村下淵温泉誌

八幡本紀壹部八冊 寶曆十三年筒井村中奉納

阿淡兩國式社考 享保六年和州男山神宮柏享寫

大躬ノ鎗 柄二間

大長刀 柄長一丈 青井下阪作

短刀一口 右二品寶德二年下本庄住人里見新左工門奉納

神鏡一面 波平 天文十五年丙午十一月十六日津名郡下物部住人三左衛門奉納

馬ノ玉 壹課 長サ一尺二寸 天文十五年丙午五月塩屋村中

大金幣串長五尺 奉納者不詳

大梵鐘壹口 貞享四年卯月塩屋村中

一 境外所有地 万治二年下本庄住人江本氏宝建立之

一 境内地 田地七段七畝九步。

宅地 壹畝式十一步

阿万町上組字龜岡三百八拾七番官有地

社地五反四畝步

龜甲山郷社八幡神社年代畧曆

- 一 貞觀三年（不詳）城南石清水八幡大明神ノ分靈ヲ勸請シ西村ノ浜ノ宮（應神天皇御船着キノ古跡）ニ安置ス清和天皇ノ御宇昭和十二年ヨリ約一千八〇年前
- 一 元暦元年八月朔日大暴風ノ為浜ノ宮陥没ノ為西村龜ヶ岡ニ新殿ヲ築キ遷宮ヲナス
後鳥羽天皇ノ御宇昭和十二年ヨリ七百五十四年前
- 一 貞永元年八月西村龜ヶ岡ヨリ現在ノ上本庄村龜甲山へ御遷宮宏大ナル新殿ヲ築キ庄内ノ氏神ト改ム、四條天皇ノ御宇昭和十二年ヨリ七百〇六年前
- 一 天正七年八月本殿改築ヲ成シ春日造五間社ノ宏大ナル萱葺御殿ニ改ム 正親町天皇御宇昭和十二年ヨリ三百五十年前
- 一 貞享二年四月本殿ノ大修繕ヲナシ向拝海老紅梁其ノ他ヲ改造シ莊嚴ヲ増ス 靈元天皇御宇昭和十二年ヨリ貳百五十六年前
- 一 明治四年七月四日附許可社格昇格阿万郷社八幡神社ト號ス
- 一 明治天皇御宇 昭和十二年ヨリ六十六年前
- 一 明治四十一年二月 兵庫縣指定神社トシテ奉幣使ノ来向ヲ受タルニ至ル
- 一 明治天皇御宇昭和十二年ヨリ三十年前

一、大正七年四月十三日 本殿改築正遷宮ヲナス 春日造五間ニシテ檜皮葺ノ現在社壯嚴ナル御殿ニ改ム 大正天皇御宇昭和十二年ヨリ十九年前

一、大正九年八月攝社松浦神社ノ改築ヲナシ檜皮葺ニ改ム 本神社ハ當山最初ノ鎮守神タル事ヲ特筆ス 大正天皇御宇昭和十二年ヨリ十七年前

一、大正十一年三月本殿改築寄附標名ヲ兼ネタル玉垣ヲ新設シ本殿ノ周圍ヲ圍繞シ境内ノ整頓面目ヲ一新ス

一、大正十五年四月神樂殿ノ改築ヲナシ益々境内ノ莊嚴ヲ極ム而シテ此ノ建築ハ大正二年ヨリ三ツ頭奉幣料ノ積立金ヲ以テ建テタル記念舎ナリ

一、昭和五年一月縣道改良拡張ノ為境内ノ一部ヲ割キタルモ西側石屋修造ニ依リ面目ヲ一新スルト同時ニ空地ニ存在ノ墓地ノ移轉ヲナス

一、神馬(銅像馬)ニ基 昭和三年四月蟬塚長平、全十八年三月阿部伊三郎両氏ノ寄進ニヨル

一、昭和十年幣殿建立ス 木本勇二氏寄附

一、神社官有地 阿万町

町 村	大 字	字	地 番	地 名	反 別
阿万町	本庄村	郷 殿	一、八二二	塞神社	二〇三
"	"	森	一、四一一	八坂神社	二〇五
"	"	郷 殿	一、八二四	大將軍社	二二四

阿万村	地蔵庵	六二〇	二桂神社	七三三
〃	長尾山	一、五二六	天照大神	一、一〇八
〃	前浜	一〇九	事代主社	二、一三三
〃	横利	四一	西宮神社	一、〇八二
〃	岡ノ山	一、〇八四ノ一	秋葉社	一、二六
〃	〃	九五九	農神社	一〇三
阿万浦	岩崎	九一八	塞神社	一一一
〃	郷殿	一、八三一	観音堂	一一一
〃	岡ノ堂	一、四三一	釈迦堂	二、二六
〃	丸山	一、二三三	行者堂	六〇三
上組	御影堂	八一三	天照大神	二、二〇二
下組	中河内	四六一	大歳神社	二、四一四
〃	蔭山	五五一	塞神社	、二五
〃	亀岡	三八七	八幡神社	五、四〇〇
〃	御影堂	二、〇三六	御鋤大神	〇、一五
〃	馬起	一、九三〇	農神社	三、二一
〃	前田	二、〇〇六	塞神社	三、一一

阿万村	若宮谷	五一六	御鋤神社	六〇八
浜	四三七	浜ノ宮社	〇一六	
妙見	三八九	美武須備神社	五〇八	
荒神ヶ谷	六八六ノ一	日吉神社	二六二九	

其他ノ神社

一 大歳神社（無格社）

淡路三原郡阿万本庄四國六十一番字中河内

祭神 大歳大祖神

由緒

町ノ東ニ属シテ青陽ノ旺気ヲ標祝シテ鎮座セル所ノ社ニシテ當昔城主安摩六郎平宗益ノ建築ナリ。石華表元禄十一年十二月建ツ。ソノ神徳ノ嚴威タルコト代々赫々然トシテ稔穀ヲ守リ賜ヒ亦疫災ヲ除禳シ給ヘリ

仍テ遠近ノ俚俗歳首ニ必ズ此ノ社ニ参拝シテ其ノ神恩ヲ祈ルノ喜例ナリ。例祭ハ正月二十日ニシテ用頭人十人アリ此ノ十人ハ御借米トシテ一人ヨリ米六升ヲ捧ゲ又一人ヨリ酒一斗八升宛ヲ出シ餅二ツヲ限り衆ニ進ム。今ニ盛ニ行ハレル又向ヒ御供ト称シ昨年頭人タリシ人々ニ其ノ際米三升ヲ出サシムトイフ

昭和九年ノ颱風被害ニ依リ神域数百年ノ老松杉ノ神木倒レ社殿亦被害甚シ昭和十一年改築ス

社地

二段四畝十四歩

一 河内神 大年神社ノ左ニアリ

祭神 大山積命

由緒 此ノ社ハ當境内ニ於テ原本ノ地主ト言ヘリ

一 樟神社 大年神社ノ右ニアリ

祭神 久具能知命

由緒 痘疫ヲ輕症ニ守ルノ神徳ナリ

一 八坂神社（無格社） 本庄一千五番地字森

祭神 素盞鳴命

櫛稻田姫命

由緒 古城主郷丹後守山城國祇園社ヨリ遷シ来タリ祭ルト言フ。

社地 二畝五歩

一 猿田彦神社（無格社） 本庄千三百二十三番地丸山

祭神 佐陀毘子命

由緒 延亨二年山頂ニ級役氏小堂ヲ南面ニ建ツ。寛保三年亥九月十三日伊勢國宇治

郡宇治郷赤門社ヨリ模シ来リテ祭ル 発願主阿万莊兵衛尉

社地 六畝三步

一 佐倍神社（無格社） 本庄千八百十六番地 郷殿

祭神 八路候神

由緒 古来毎年春端午 道饗祭執行セリ ソノ起原不知

一 大將軍神社（無格社） 本庄千八百十八番地 字郷殿

祭神 大山祇命

由緒

俚老口碑云古城主某山城ノ國平城ノ乾位ナル大將軍社ヨリ模シ来テ邸内ニ祭ル所 正
徳三年二月七日現山岳へ遷シ来リタリ 又郷殿ノ守護神ナリトイフ

仲野安雄ノ神社奇ニ著明ニシテ在西京 所祭一座石長姫神日吉神道密記日大將軍神者

大山祇女木花開耶姫之姉也。神代昔以其ノ顔貌醜而遂不幸焉言故此神能守夫婦之配匹

社地 二畝二十四歩

一 塞神社（無格社） 本庄千九百九十六番地 前田

祭神 八路俣彦命

由緒 古代ヨリ毎年春午日道饗祭ヲ執行セリ 該社ノ起原不知

社地 三畝十一歩

一 御鞆大神社（無格社） 本庄二千二十六番 御影堂

祭神 豊受皇太神宮

由緒 里人稱シテ伊勢神宮トイフ。八幡廟ノ東南 大師堂ノ北ニ鎮座ス

寛永十年正月十六日伊勢國度會郡山田郷外宮ヨリ模シ来タリ祭ル
享保十二年ヨリ境地三百歩免税セラレタリ

社地 十五歩

一 天照大神社（村社） 本庄下組八百十三番 御影堂

祭神 天照皇太神

由緒 當昔伊勢國宇治郡五十鈴宮ヨリ模来テ鎮坐スト言フ ソノ年曆無考也

社地 二段二畝〇二歩

一 塞神社（無格社）

本庄二八番地字中殿 明治二十三年一月二十二日大神社へ合祀ス

祭神 八路供彦神

由緒 無考之

一 塞神社（無格社） 本庄五十九番字酉後

明治二十三年一月二十二日大神社へ合祀ス

祭神 久奈度神 由緒 不詳

一 塞神社 四百〇五番 字ソフゾ

祭神 八路俣媛神 由緒 不詳

右村社大神社境内ニ合祀ス（明治二十三年一月二十日）

一 西宮神社（村社） 塩屋四十一番地 横利

明治四年七月四日社格許可

祭神 三坐 天照大神 八幡大神 春日大神

由緒

石華表拜殿 門守人アリ（隨身門）例祭ハ正月二十日ナリ社僧ハ上本庄神宮寺ナリ
拾盤間戸尊ヲ勸ス當社ハ阿万郷十一ヶ村ノ尊神ニシテ上本庄幡廟ノ西ニアタル故西
ノ宮ト稱ス 三神祭リテ各御身体木造五六寸也

當社建立棟札ニ慶安四年卯月正月二十八日ノ銘見ヘタリ 阿万庄塩屋村西ノ社ト銘
ス上着札モアリ寛文十戌年正月二十日ノ銘アリ 又貞享元子年三月六日再建ノ棟札
モアリ

一 御鋏神社

西ノ宮ノ左小祠ニシテ寛文五年正月伊勢ヨリ模シ来ル 木鋏ヲ以テ神体トス社僧ハ光明寺ニ
シテ例祭ハ九月十六日又毎年一万度御祓ニ扇子二本ヲ副ヘ勢州神社中西氏某ヨリ送り来ル
是當社ニ鎮祭ス御鋏廻シト稱シ每六月十四日里民三人ヲシテ鋏扇子白弊等三品ヲ携ヘ田毎ヲ
廻リ豊饒安年ヲ祈ルト言フ

一 秋葉神社（無格社）塩屋千四百十八番 字岡ノ山

祭神 火産巢蠶神

由 緒 安永三年遠州ヨリ鎮坐シテ三寸許ノ木像、例祭八十一月十六日社僧光明寺ニシテ当

社鎮祭ノ後此ノ地ニ災ナシトイフ 社地畝数一畝十二歩貢税ス

一 蛭子神社（無格社）塩屋 八百五十九番地 字川曾山

祭神 事代主命

由 緒 瀬山ノ東谷ニアリ石華表石段ヲ登ルコトハ八間許 社境ノ畝数百歩許税ヲ免除ス

例祭正月十六日 社僧上本庄清潮寺陰陽ノ木像ニ互彩ヲ加フ

一 天照大神（村社）吹上千五百二十五番 字長尾山 明治四年七月廿四日社格許可

祭神 二坐 天照皇太神 蛭子神社 由緒 不詳

境内神社三社アリ 秋葉神社 祭神 秋葉神 金比羅神社 祭神 金比羅神

佐倍ノ神社 祭神 八路俣媛神 境内 大山祇神遙拝所 由緒 不詳

一 蛭子神社 吹上 百二番地 字前浜 祭神 蛭子神

由 緒 吹上浜ノ半ニ在リテ浪際ヨリ一町半許ニ石祠アリ 風ノ吹キ飛バス為ニ石祠ヲ建テ

夕リ 社僧上本庄神宮寺

一 日吉神社（村社）阿万町六百八十六番地 字荒神ヶ谷 東組 明治四年七月四日社格

許可 祭神 大山咋命 由緒 天正年中城州比叡山ノ日吉神社ヲ模遷シ来タリテ祭ル神ナリ

一 境内神社 大鍬神社 豊受皇太神ヲ祭ル 由緒不詳

一 美武須備神社（無格社）（東組） 阿万 三百八十九番 字妙見 祭神 美武須備神
由緒不詳 社日ニ相撲大會アリ

一 山王祠

當社ハ舊中ノ河内ノ堂所ト言フ山頂ニアリ中世人々此ノ山中ニ入レバ腹痛シ故谷口金屋ト言フ所ニ移ス後海上往来ノ船舶ニ奇難アルヨリ又妙觀寺ノ山頂ニ移ス小祠ニシテ一間四方許也東西ニ村ノ尊神タリ例祭ハ正月ト六月各十八日也妙觀寺別当正月男子ノ頭式六月ニハ此ノ村ノミ女子ノ頭アリ

一 若宮神社 阿万三百四十二番地 字若宮ノ谷 西組 祭神 仁徳天皇
由緒 小祠ニシテ西向ナリ

神像ハ昔靈夢ノ告ヨリテ此ノ地ヲ穿ツニ一ツノ小像ヲ得タリ 是則チ仁徳帝ノ御容貌ニシテ間浮檀金束帶ノ製作也乃チ若宮ト尊ビテ祭レリトイフ（八幡 應神天皇）ノ御若宮様ハ即チ仁徳天皇ナリ 故ニ八幡様ニナゾラヘテ若宮ナリ

宮所ノ神社集ニ著明ス例祭六月晦日現今ニ柱神社ニ合祀セリ 尚若宮室ニツキ中野氏蔵ノ書ニ詳細アリ即チ左ノ如シ

古夢之為レ祥也不レ可不ニル徵一トセ焉爰ニ三原郡阿万西村ノ西谿相ニ石清水若宮之祠矣故老相傳言龜岡主祀ノ僧有眞師一夕夢ミテ有ニ神人一峨冠博帶徐歩近前詔直ニ曰西村西谿ハ秀奇ノ境也

創ニ立於若宮ノ祠一ヲ祀セバ即チ里民豊阜ナラン矣且有ン瑞貨之伏蔵者一以之驗セヨ焉吾ハ即八幡大神維レ
時元録三年庚午六月十五日也真反ノ側頃風雨一聲嘯夢頓覺テ精神悦惚タリ焉低レテ熟慮ルニ多クハ是妄
未レ可從焉恭シク再思謂ヘラク奇哉吾カ夢ヤ也雖ニ夢寢之神教一何ソ敢テ忽諸セン也夫レ夢為レ眞者古今之
蹟未レ為尠ト也一嘗ニ試之一可ト矣廼チ与ニ里中ノ父老一俱ニ西谿相ミルニ其低窈廓慳レ宜ニ土腴水淨草木
惟○リ惟條試ニ棲レムル聖之靈藪也因テ器錘以除ニク苔忽得タリ白銅鏡團柴金一塊金幡首金燕各一枚一
果如ニシ神教一矣因テ以為鏡ハ是神明之宝器其餘貨モ亦平来之物蓋故祠之廢基ニシテ而大神著ニス之ヲ當
今一ニ者ナラント乎父老モ亦謂其レ如クンバ此則拜世之認メテ妄ヲ為レ直ト之類ニ益々知神告ノ之不誣夢ノ之可徵
矣不レ須レ圓スルコトヲ不レ俟トスルコトヲ而炳如タリ復奚ヲカ疑ント焉於レテ爨ニ論メ里民一經ニ知神廟一ヲ興ニシキ豊宮
梓ヲ於下ツ磐根一ニ設ニク神像一併矣所一ハ崇祀一スル乃チ浪華高津宮駅ノ寓天皇果也歲時ノ祭尊匪レ懈ルニ
且脩ニシ荒和ノ祓ヲ於炎涼之交一供ニ天管麻於千座机一置ニ神酒一宜ニ太諄辞一ヲ甌窶汗邪百穀穰トノ以テ
及ニヒ子弟有ニント孝義行一稻蟹疾病必禱ル焉觀ルニ夫レ左右ニ乎海嶠一ヲ勝概不レ可ニ彈紀一ス焉熊野峰
遙ニシテ眺ニ千載之仙蹤一鳴門ノ濤近聽ニク九淵之竜吟一ヲ崇山幽壑脩竹茂林間處一ニ乎神境一ニ南風
薰ニタリ乎瑞籬一ニ松琴解ニク民之愠リテ嗚呼此ノ神望炯之仁推讓之德千石如レ一而鎮ニ撫干鄉邑一ヲ廟食
干此ニ淤ニ焉息シユ焉干此一ニ永ク萬斯年ナラン矣邑長某氏某甲性謹廉ニ兼好レ古懇レ予ニ以レ記セヨト神驗之
原委ツ貪道謝ニ不敏不レ可ヲ聊録ニ所聞之顛末一ヲ以應ニスト其需云 宝曆六年丙子仲春穀日

龜岡山神宮蘭若主祀學密沙門法雲拍手

拜稽昔疏ニス於一柱觀南軒一

一・二柱神社

阿万六百拾番地

字地藏ノ尾

(西組)

(村社)

明治四年七月四日社格許可

祭神

伊奘諾命

伊奘册命

由緒 榎本氏系図中太郎太夫源春信ノ條ニ二柱神社ノ由緒アリコ、ニ轉記セシニ

永祿十二年巳十二月廿三日頃ヨリ東風吹詰メ大雨降續キ舟一艘モ戻申サズ 村中越年ノ用意出来難ク一統相歎キ申故某彼是手配致越年致サセ村中目出度春ヲ迎ヘ然而正月初会ノ砌リ村民申聞セ候ハ地盤ノ渡世計リニテハ安堵ノ思ヲ得スモ慮スモ昨冬ノ如キ杯指シ當リ難波ノ儀モ出来申スヘキ間先田畠ヲ開發致是迄ノ所作ハ作間ニ致シ作業ヲ第一ト致ス方可ナラント申シ聞セ候処村民一統得心致シソレヨリ御領主々願上申所随分出情致シ開發致スベキ旨仰付セラレ開道具唐鍬、高麗鍬、踏鋤等ノ類ヲ下シ置サレ重テ禿申ス節ハ持參致ス可シ引替遣スベキ旨仰付セラレ大イニ嬉勇ミ村民皆々田畑開發シ終リ右ノ趣案内致シ申処御改ノ上村中家數十八軒是有所高十八石ニ御定成ラレ粃種子ヲ下シ置サレ弥出情致シ作致スベキ旨仰付ラレ畏リ植付ケ作致シ申処立毛相應ニ生立チ嬉ビ居申処実入時ニ及荒潮込入り其上虫刺多クシテ一円實入申サズ亦疫病流行致シ死人多クシテ村民殊ノ外歎キ申故某情慮ルニ往古ヨリ八幡宮御鎮座ノ跡トシテ古跡ハ有レ共其ノ將上村へ遷ラセ玉ヒ古跡ノミナレバ産土神トシテ所守護ノ御神無クバ有ルベカラズト存ジ申故地野村ニ地野太夫ト申博學ノ人は有故其人ト相談致シ申処當國ノ一宮皇太神宮ハ伊奘諾大御神ニテ伊奘册大御神ト二柱ノ大神ハ天下万物

ノ祖神ニテ甚尊キ大神也此ノ大神ヲ勸請仕ルベキ方宜シト申ス故村人へ此ノ趣申聞セ申処大ニ喜ビ何分トモ宜シク御頼ミ申上ルト申サレテ右ノ大神勸請ニ一決仕居申処へ仁頃村ノ住人赤野左近太夫ト申人來リ我等村モ同事ナレバ何卒産土神ニ御加入下サルベシト重々頼ミ申処同様ニ約諾致右地野太夫ト三人相談ノ上元龜元年午十二月大晦日同道シテ郡家ノ宮本へ社参仕翌正月三日迄三日三夜参籠仕四日ノ朝正七ツ時勸請式相濟神官ヨリ王殿ヲ授リ一札ヲ述下向ノ砌リ村界迄村人共御迎ニ罷参上仕供奉致何ノ故障モ無ク社檀へ遷シ奉ル。ソレヨリ年々正月廿日ヲ祭日ト相定メ神役祝詞ハ某仕官奉ル。

一 御鍬神社 (無格社) 阿万五百十六番地 字若宮ノ谷 (西組)

祭神 豊受皇太神 天照皇太神 八幡大神 由緒 不明

一 浜ノ宮 (無格社) 阿万四百三十七番地 字浜本 (西組)

祭神 八幡宮 住吉大神宮 由緒 元郷社発祀ノ古跡

一 八阪神社 (無格社) 阿万八百五十番地 字松ヶ原 (西組)

祭神 須佐男神 由緒 不明

仏閣ト寺坊

一 神宮寺

- 一 宗派 古義眞言宗高野派発光院（現今ハ遍照尊院ニ合併セラル）末龜岡山延命院ト号ス
- 二 所在地 三原郡阿万町本庄上組三百八九番地 郷社龜岡八幡宮ノ南正面
- 三 本尊

1.	延命地藏菩薩	木造	高二尺五寸	本尊
2.	不動明王	〃	一尺二寸	脇士
3.	多聞大王	〃	一尺二寸	脇士
4.	弘法大師	〃	二尺四寸	本堂安置
5.	薬師如来	〃	二尺四寸	本堂安置
6.	不動明王	〃	三尺六寸	護摩堂安置
7.	阿弥陀如来	〃	約八貫	護摩堂本尊

二 事由

当寺ノ創建ハ往古ナレドモ屢ク火災ニ罹リ古文書縁起等考証記録現存セズ唯「龜岡山典故録」ナルモノ一部アリテ中古以後ノ住職名及其ノ治績ノ一斑を知ルコトヲ見ルノミ但シ八幡宮ニ関スル記事ハ相当詳書セルモノアリ

寛永中ノ官記ニ宮坊トノミ見エタリ是當寺ナルベシ享保中ノ官記ニ寺境ノ畝數八畝二歩（里

正九畝二十步トイフ。此内六畝三步（里正七畝二十一步トイフ）官税ヲ納ムナリト。八幡宮ノ社僧ナリシガ神佛御取分ケノ時ヨリコレナシ。此ノ寺ニ宝物種々アリ中ニモ軸物不動明王像ハ焼ケズノ不動トテ國宝ニ準ズルモノニシテ屢次ノ罹災ニモ其ノ厄ヲ免レタモノナリ。龜岡山典故録ニ記載セシ龜岡山神祠記ノ條ニ曰ク

距ニ州之故府一可二十里一有ニ阿万郷一三原郡之南極也。後ハ即チ峯羅列シ深谷幽泉アリ前臨ニ南溟一鵬翼ノ所ニ博徒一煙波微茫ヲ突一一起ニ者潮崎ナリ行人曾テ賦ニ一網網一而憐ニ漁人之辛苦一嗟此生之如浮塩屋吹上之長汀粉沙布レ地ニ千秋ノ雪皚々茅舍瓦檐斷續於田園寺樹

間陸海之勝不可盡言焉昔者細川源公城而居公則養宜館族室々町幕府命所分封也時屬版蕩

兵争競起以故數世之後家廢其故居之墨塹禾黍離々御有八幡宮祠闔郷數村祠幸焉

土人称之大宮相傳貞觀中大神駕龜而來龜化為一兵就而宮言兵高幾刃縱橫若干丈

曳尾四首形質惟肖因命有龜岡亦名龜甲山美奇縁靈蹤或人曰昔龍伯氏釣巨人敖魚也

岱輿員嶺ニ山流於北極龜用頁其一支來作小仙区亦未可知焉傍人間之所謂壑其然也

言涉怪詭不可采焉原大龜之翔建也當在右大将開鎌府之後也于時小笠原氏當於吏務之任

則其僚屬之所為乎不可得知焉足利氏自握兵符細川氏之焉熟按事情東関之士擬鶴

岡而所經營以名龜岡也已蓋以其祖宗之所欽仰故創之以龜對鶴也景慕源大将之造構且

祝以龜之遐齡子雖末東遊檢圖狀即尖地頗似鎌倉瀨海之地勢也所其模倣誠有以也抑鎮

守府將軍義家朝臣自首服於雄德山祠以降源氏控弦之家崇祀已久矣其氏族亦率由乎

胎厥之意固可嘉焉恭惟八幡大神者初征韓之役在胞胎因稱胎中天皇腕肉類軀形即步之象也舉田之名与之焉天皇龍鳳之姿聰達其監備英武之德聖表有異焉三韓來王王仁婦忙母于神功之哲后子菟道賜鵜之聖皇且有武内棟梁之賢於是皇威益々著聲教光被於四裔宜瀾瀾溪毛邊豆乎萬世龜岡神殿今尚熾然德輝日新宮紺宇於瑞籬而措安養
覺王從本迹之說神庫所藏有華般若等諸大寺乘經某々年間某々諸豪所喜捨跋尾具姓名可往考焉就中神宮精舍掌祭事祝人供僧奉乎歲時幣尊無止福壽維神之賜所願黎民富庶齊躋壽域矣。

トアリ之ハ宝曆ノ比住職セシ法雲上人ノ筆録スル所ナリ
五境域

境内地民有阿万町本庄上組宮ノ南三八九番地式百九十七坪二九郷社八幡宮ノ南二位置シテ東ハ本庄川ニ添ヒ山門アリ石堀ヲ回ラシテ一劃ヲナシ西縣道ニ添ヒ南ハ民家北ハ路ヲ隔テ慈眼寺觀音堂及鐘樓ニ接シ山間ニ入り正面玄關ハ本堂ト庫裏ヲ連絡スル構ヘナリ庭前ノ松並木ハ輪輿ノ美ニ一段ノ風致ト雅趣ヲ添ヘタリ

六建 物

本堂 玄關 庫裡 竈屋 護摩堂 山間 納屋 等あり

七歴代住職

寛永十二年正月十一日退住

快覺

寛政五年五月

寛秀

正保三年一月十六日

宥眞

延宝七年一月十七日

頼桑

寛保元年一月朔日

秀典

〃 三年一〇月二十九日

寛延元年四月七日

宝曆三年四月四日

明和二年四月十七日

〃 二年五月朔日

一 観音堂

社境ニ安ズ亀甲山慈眼寺古祥院ト号ス

本尊ハ聖観音ニシテ説ニ上石八幡ノ御神像ノ出現アリシ時龍宮ヨリ當高影向スル処ノ靈像ト
言フ 又昔堂宇造営ノ時官所ニ乞フテ良村ヲ賜フ享保中ノ官記ニ方境ノ畝歩二段五畝官税ヲ
収ム廻ノ諸樹伐樹ヲ止ムト言フ堂ハ南向ニシテ當州観音巡詣第九番ノ靈場ニシテ詠歌アリ
又圖ノ如キ掛牘珍傳ス木地ニシテ文字彫刻シ此ノ牘アリ 往古ハ三十三番悉クアリシト見え
タリ

天保十二年マデ星霜三百二十九年ヲ経タリ

(掛牘左ノ如シ)

文化一〇年

徳惠

嘉永四年一〇月朔日

慶雲

萬延元年一月四日

知雲

慶応二年八月一三日

千乘

明治九年九月八日

宥禪

明治三三年頃

溪神孝運

明治四二年十月

〃 寂南

大正七年十二月十日

瑞雄

二尺八寸五分

此字不明分



五の眼のまへしきとくか 承正十年癸酉 宥卷鶴
淡州三十三所巡礼九番 新之秀若
くやろまのあきふしん 正月十七日 始之

寸 五

一 萬勝寺

一 所在地名

三原郡阿万町ノ内本庄上組字小路元上本庄村

社寺名称

眞言宗古義派高野山遍照尊院未三等格院萬勝寺

本尊名称

金剛界大日如来

脇立 不動明王

毘沙門天

清潮寺本尊

阿弥陀如来

本願望本尊

大日如来

二 事由

當寺へ建保三年洛西梅尾寺ノ住明慧上人諸国執行ノ際當地ニ来リ一寺ヲ結ビ行基菩薩ノ作
金剛界大日如来ノ像ヲ安置萬勝寺ト称ス茲ニ居住セラレシ後貞永元年正月十九日享年六十

又貞永元年八月本庄村八幡社ヲ阿万村龜ヶ岡ヨリ移轉ニツキ万勝寺本尊大日ノ模像ヲ以テ該社地ニ本願ヲ設置サレ是ノ創立ニ際シテハ大檀那監物兼友大イニ皈依アリキ又延宝二甲寅年八幡宮ノ本地阿弥陀ノ像ヲ同境内ニ安置シテ清潮寺ト号ス御維新ノ際神佛御取別ノ官命ニ因テ右本願坊主清潮寺ハ万勝寺ニ合併サレタリ

三 建物

方丈桁行 七間 梁六間 安永年中火災ニ罹リ天明元年七月再建

庫裏桁行 七間 梁七間 全 右

納屋桁行 三間半 梁二間 文化二丑年建

四 境内

寺境内地民地 第一種境内 耆反八畝二十七步

風致乎地ナリ東ハ神社ノ一岡ヲ備ヘ南地北地及西ハ民家ナルモ一院ノ構勝景トス

五 永續基本財産

建物維持上ニ関シテハ基本財産トシテ田畑山林耆町七畝十七步アリソノ所得ヲ以テ支持ス

六 寶物

此ノ寺ニ明惠上人四座講ノ式書珍傳シアリシガ往古寺院出火ノ時ヨリ不明ナリ

七 歴代住職

建保三年山城國梅尾 明惠上人開基 此ノ間延寶年間迄凡ソ四五〇年不詳ナリ

延寶二年五月十五日退任

快蓮

明和八年六月九日

惠隆

宥玄

安永四年三月一三日

隆雅

覺眞

寛政五年二月廿七日

如寂

頼眞

寛政七年三月廿七日

尊元

享保四年六月廿六日退任

知情

文化七年八月十九日

行惠

宥算

安政三年八月十七日

仁然

智隆

明治三年八月

如十

延享四年五月九日

寶照

三二年十二月十二日

知勝

度銳

四四年五月二十五日

龜岡得應

寶曆四年二月二十二日

如山

堀部眞勝

一 妙觀寺

一 所在地

三原郡阿万町ノ内阿万字荒神ヶ谷

阿万東村

二 社寺名称

眞言宗古義派高野山遍照尊院末妙觀寺

三 本尊名称

薬師如来

脇立

日光菩薩

月光菩薩

阿弥陀如来

觀世音菩薩

四 事由

当妙觀寺ハ三寺三尊合像ノ一寺ナリ ソノ一ハ前妙觀寺へ往古靈場屋霜移換ルト雖モ本尊阿弥陀如来ノ如キハ聖徳太子ノ手模並人口ノ傳フル所太子ヲ以テ開基トスルナリ蓋シ淡路

南海岸ノ沈木アリ太子ノ御手ニ入ル事由縁ナキニアラズ其地比靈位ヲ去ル事八町許金屋村ト稱ス前領主小田加賀ノ守并ニ自居ノ地ヲ檀寺トス亦武臣左近太夫祈願寺トス寛政ヨリ天正ノ頃ニ到リテ榮茂其ノ詮アリ天正中ニ加賀ノ守討死スソノ子彦六人尉遁世ノ後寺邑共ニ衰損ス慶長ノ頃ニ到リテ亡泯極ス翠木尊叢澤ノ間ニ特在シテ闕余トシテ子然タリ

寛永中ニ至リ遂ニ土塵ト成リ今金屋村旧社寺ニ於テ先師ノ石浮圖及檀人墓碑多ク有之ナリ其二ハ萬藏坊ハ今此ノ院ヨリ未ノ方ニ行フ事三町許リ本尊藥師如来ハ行基菩薩ノ模刻ト言フ一傳ニハ定朝ノ作而シテ像中ニ書記アリトイフソノ長サ七尺之ヲ以テ本尊トスコレ故ニ行基菩薩ヲ以テ本開祖トス

宗長師ヲ以テ中興トス宗長師ノ名刻ニ石碑アリ慶長ノ人ナリ隔後阿州橋氏ノ僧侶住持ス或時病床ニアリ夢裏分明寺ニ本尊藥ヲ與ヘル事覚エテ病愚連ニ癒ヘ其ノ後延寶ノ初才寂ス石塔アリソノ前當國由良城主脇坂氏萌堂ヲ歎テ本尊俱ニ寄キ由良既ニ乗シ上ル船離岸海面俄ニ鼓動暴風轉覆諸具擧没シテ本尊獨陸裏玉フ里人負ヒ來テ再安置ス本所古來靈驗不少言

其三者ノ中御堂ハ本尊觀自在尊也當郷ノ惣祀八幡宮ノ四方各十町許去テ各自置一靈像是其ノ一尊ニシテ今此ノ寺ノ北一町半程ナリ奥ス當村邑長榎本傳兵衛尉孝長歎澆季浮慢ニシテ三所ノ香供有ルヲ關怠貞享元年聞達官吏安列三尊一字者今此ノ妙觀寺也

五 建物

堂 宇 梁四間 創立延宝五年八月八日大施主榎本傳兵衛再建文化元子年四月十二日

客 殿 梁八間 創立貞享二乙丑十一月大施主榎本傳兵衛再建寛政八丙辰四月廿日

閻魔堂 桁梁 二間 梁一間 貞享四丁卯年五月建立 施主 庄左衛門之尉

鐘樓門 桁三間 創立元禄七甲戌六月廿四日施主榎本傳兵衛尉

梁二間 再建天明九乙酉四月廿四日

納 屋 桁四間 梁二間 年代不詳

六 境内地 寺境内民有地第一種三百三坪

七 寶 物

縁起有之箱書付ニ後水尾仙洞御筈トアリ箱内ニ小切ニ仙洞様（お廉 定メノ團張附アル印
半分虫食フ、右縁起ノ奥ノ年号ヲ見ルニ惟時元禄十三龍集辨春現住有教謹誌トアリ依テ現
存スルハ古縁起ノ寫ナランカ 当時ハ昔萬蔵谷ニアリテ寺号ヲ萬蔵坊トイフ

元禄年中ニ今ノ地ニ寺家ヲ轉移ス 當國薬師巡詣第十八尊ノ靈場ニシテ元本庄河内薬師ヲ
以テ十八番靈場トセシヲ移シ来レルモノナリ故ニ詠歌ニ言フ（本庄観音ヨリ行程十五町）

詠歌 『迂し来て 東方瑠璃ノ都より

照らすも妙に観寺の月影』

八 歴代住職

慶長二〇年七月十日	退住	宗永	嘉永四年九月二日	退住	得龍
享保三年五月廿日		宥教	明治十年		真症
〃 六年二月廿九日		繼歆	〃 十七年		金屋益龍
元文三年三月一五日		義洞	〃 二五年十二月七日		〃 龍詳
寛保元年三月一八日		賢斯	〃 四三年一〇月		溪神寂惠
延享元年六月一二日		珠峰	大正六年九月		〃 孝運
宝曆九年七月一四日		慈崎	〃 七年十一月三日		播摩昭瑞
明和六年一二月一八日		契宝	〃 九年一月		溪神孝運
文政九年五月一六日		得峰	〃 十五年一月十日		〃 瑞雄
天保十一年八月晦		義海			坂惠瑞運

一 河内薬師寺

葛原山正福寺ト号ス河内ノ川辺ニアリ享保中ノ官記ニ方境ノ畝歩二段五畝官税ヲ収ムルコトアリ周囲ノ諸樹ハ伐採ヲ停ムト言フ 本堂ハ南向ニシテ方三間瓦葺ナリ

本尊座像長三尺許蓮台ニ銘記アリ左ニ誌シテ言フ 葛原山正福寺建長元年七月十一日艸建願主賢物兼友生年六十九才大佛師善慶

按ンズルニ兼友ハ寛元年中此ノ村ニ居レリ建長ハ八十七代後嵯峨帝ノ年号ニシテ將軍頼経治世ナリ當時ハ當辺ニ僧坊十二区アリシナリト言フ ソノ遺跡ハ 田鶴庵 清壽庵

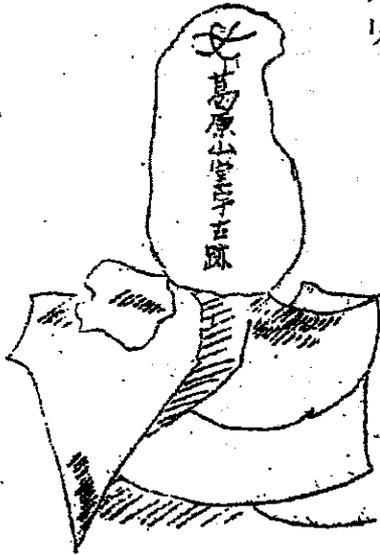
金剛坊 タング庵 念仏堂 彌勒寺等ナリ ソノ他詳ナラズ 而シテ此ノ付近ニ多数ノ五輪塔掘リ出サルナリ 此ノ薬師寺ハ昔後山ノ高峯ニアリシガ海上往来ノ船又ハ山間往行ノ馬上通行ニ災アリシ故ニ此ノ地ニ移スト言フ旧地ハ古堂ト言ヒテ高峰ニアリ蓮池等今ニアリ現今山頂ニ平坦ナ所アリ 昔時堂宇ノ跡明ニシテ老松一樹ト石碑アリ

脇立ハ 日光 月光 両菩薩外ニ不動明王毘沙門天ヲ合祀ス 不動尊ノ彫像極メテ古ク生彩崇嚴ナリ ナホ亦弘法大師聖天像ヲモ合祀ス 金佛 聖天像ハ明治ノ中頃紛失セリトイフ本尊薬師如来ハ一幅ノ巻物ヲ手ニセルモ如何ナル間違ニヤ神社ニ関スル記録ナリトイフ當寺元四十九薬師十八番ノ札所ニシテ其ノ詠歌ニ

『程近き東方瑠璃の本庄は 阿萬の清水に冴ゆる月影』

トアリ札所ハ其ノ後東村薬師ニ移セルコトハ前ニ記セルガ如シ

昭和九年颱風被害ニ依リ向拜改築並ニ堂宇修築ヲ行ヘリ「建築費約五百円余」
木本その氏其ノ寄附ヲ
ナセルモノナリ



昭和十二年初春寫生

一・千手観音

上組大歳神社東ニアリ 堂宇ハ西南西ニ向フ

千手尊 長一尺八寸許リ脇立ハ昭和十年新ニ迎ヘラル処ニシテ不動明王 毘沙門天ナリ

享保中ノ官記ニ方境ノ畝數三畝廿四歩圃地官税ヲ収ムルトイフ

傳説ニ曰ク昔より旧七月ノ十日ニ此ノ堂ニ日參セバ四萬六千日ニ向フト傳ヘソノ靈驗ヲ新

ニシテ萬病ソノ他ノ難ヲ去リ福ヲ向ヘルト傳ヘ現今ソノ靈驗ヲ受ケシ事數限りナク目下旧

七月十日ニ到レバ四隣人者ハ申スニ及バズ全淡各地ヨリ又阪神地方ヨリ遠クハ北海道ソノ

他ヨリ年々參詣人ヲ増加シツ、アリ

此ノ庵昔 榎本氏某（上本庄）靈夢ニヨリテ建立スト傳フ

現在ノ本堂ハ明治卅一年ノ再建ニアタルモノナリ

明治四十一年一部造作ヲ行ヒ 昭和九年ノ颱風被害ニ依リ庫裡ノ各部改築ヲ行フ 昭和十一

年竣工ス 建築費用金六百円余金トシテ木本勇次氏ノ寄附ニナルモノナリ

一・地藏三庵 塩屋村

三所ニアリ 一ハ村ノ東北佐野ノ山中ニアリ 東向ノ小堂ニシテ方二間傍ニ草庵アリ

一ハ組ノ西北ニシテ木場ノ谷ノ海濱ニアリテ寛政ノ末年ココニ安置ス

一ハ権利ト言フ所ニアリ 堂宇四間ニ五間 境地ノ畝歩二十歩租税ニ除ス 石佛二体アリテ

長サ一尺二寸庚申ノ像ト大師ノ像ノ二体ナリ 上組ノ元清潮寺司掌ス

木場ノ堂ハ三間ニ五間ニシテ境地ノ畝歩十五歩租税ヲ除ス 石佛ニシテ長八寸ナリ 光明寺
司掌ス 佐野ノ堂ハ地藏ノ原ト言フ所ニアリテ境地ノ畝歩廿七歩貢税ヲ収ム 石佛ニシテ長
サ三尺許ナリ神宮寺ノ司掌ナリ 右各々例年七月二十四日 佛会踊ヲ行フナリ

一 大師堂

神宮寺ニ向ヘル山手ニアリ 堂宇西向ニシテ庵アリ 享保中ノ官記ニ曰ク畝数二段貢税ヲ収
ムトアリ

高野山安東院俊堯（快盛）阿闍梨明曆ノ頃一庵ヲ草シテ朝懺暮悔機熟スルヲ待チテ一寺建立
ノ意志アリ云々ノ記載龜岡山典故録ニアリ之大師堂創草ノ上人ナルベシ 現在ノ本堂庫裡共
ニ昭和三年五月再建落成セリ

一 清水薬師

町ノ中央ニアリ（下組）

寛文八年ノ頃ハ安樂院ト号スル東宮記ニ見エタリ 享保十五年ノ官記ニ薬師庵方境十三間四
方許此ノ畝数十二歩貢税スル所ノ地ナリ 堂ハ東南向ニシテ上本庄萬勝寺ノ屬庵ニシテ境内
ニ辨天ノ小祠ヲ鎮座ス 相傳フ此ノ堂宇ノ旧地ハ東ノ方川向ヒ渡樋ノ向ヒト言フ所ニアリシ
ヲ中世コ、ニ移セリ（此ノ寺ハ萬勝寺ノ隱逸傳也）里俗ニ曰フ昔ハ此ノ村ノ某（作左エ門ト
稱ス）失心シテ薬師ノ像ヲ福良ニ負ヒ行キテ賣リタルガ後ニ到リ村内ノ者行キテ受返サント
セリ時ニ福良慈眼寺ノ住持コノ像ノ古作ナルコトヲ知リテ人ヲシテ語ヒ寺ニ安シタリ

後ニ到リ此ノ事ヲ村人ノ知リタル所トナレドモ致シ方ナク新造ノ藥師像ヲ求メテ庵室ニ置ケ
リ今ノ尊像是也 然レバ現慈眼寺ノ木像ハモト此ノ村ニアリシ尊像ナル由言ヒ傳フ

一 光明寺

密宗高野發光院未來迎山ト号ス

寺家南向ニシテ境地ノ畝數二畝二十四歩貢税ス本尊阿彌陀長一尺九寸木佛配位勢觀及藏王權
現安彌作本堂三間半四面ナリ 或ハ曰旧當寺ハ庵室ノ地ヲ元祿七成年冬寺家建造シテ東都寬
永寺ヨリ三員ニ寺号免許セラレテ吹上村金剛寺 阿万東組妙觀寺當寺等也 開基僧周海

一 大日堂（下組）

神宮寺ニ向ヘル山手ニアリ 堂宇西向ノ庵ナリ 大師堂ノ南ニアリ
本尊ハ大日如來 脇立ハ弘法大師 不動明王ナリ 現在ノ建物ハ昭和三年七月再建ニカ、ル
詠歌ニ「みほとけの中にすぐれて大日の光にもるゝものごとはなし」

一 大師堂（東組）

東組中ノ河内山中ニアリ 土生街道ノ左ニアリテ堂宇二間四方ニシテ東南ニ向ク厨子ノ内ニ
高サ二尺許リ亘リテ三尺余ニシテ石ノ色白色ニシテ上部ニ小サキ足跡アリ村説ニ弘法大師堂
地ニ遊馬アル時石上ヲ踏給フニ忽チ其ノ跡石面ニ存シタリ後ニ到リ之ヲ本尊トス

（常磐草ニコレ附會ノ説ナルベシトアリ）

一 大日堂（吹上村）

吹上村ニアリ 長尾山金剛寺号ス 享保中宮記ニ言フ境地二十五間四方租税ヲ除ス 庵室及
ビ太神蛭兒合殿ニ勸ス 八十八ヶ所靈場巡詣十三尊世 仲野安雄神名考ニモ之見エタリ

一 大師堂（中西組）

大師石佛座像ノ長サ一尺二寸

庚申石佛立像ノ長サ一尺三寸

境地二畝歩租税ヲ免除スト官記ニアリ 光明寺ノ司掌ナリ 堂宇一間半二三間中西ノ官有林
ノ中二構ヘリ

一 多門庵

方境ノ畝数三畝十五歩貢税ヲ収ムルノ地ニシテ 或ハ又別當坊ト稱ス 此ノ山ノ西南ノ端圓
山ニアリ方二間ノ小庵ニシテ神宮寺ノ屬庵ナリ

一 鐘樓

旧所在ハ八幡神社境内築山ノ現在天神宮祠ノ辺ニシテ神佛ヲ取り別ケノ節現在ノ神宮寺ノ北
ノ觀音堂正面ニ建物ソノマ、ニ曳キ行キ移轉セルモノナリ

鐘ハ寛政十二年鑄造ニシテ本庄上組字河内乙八八四番地ヲトシテ鑄造セルモノニシテ全地ハ
畑地ノ一部ヲ凹地トナシ一畝十一歩ハ現ニ其ノ儘凹地トシテ存在セリ

銘ニ曰ク寛政十二年庚申十一月七日再々興 願主 庄内十一村氏子中

別當 神宮寺法印 大惠上人誌 當國下物部村之住 鑄物師 吉右衛門

西播姫路之里住 治工 田中五郎平 藤原謙享造之

世話人 講中 十一ヶ村多数記セリ

一 阿万町廃寺坊跡

一 清潮寺

密集野峰発光院末龜岡山ト号ス 本尊阿彌陀如来

寛永四年ノ官記ニ此ノ寺ノ寺号見エタリ 又享保十二年ノ官記ニ寺境ノ畝数團地ニ畝十八歩官税ヲ収ムルノ地トアルナリ

此ノ寺ハ延宝二甲寅年八幡宮ノ本地彌陀ノ像ヲ同境内ニ安置シテ清潮寺ト号セシモノナリ 然レ共明治維新ノ際神佛御取別ノ官節ニ因リテ當寺ハ万勝寺ヘ合併セラレタリ

昔當寺ニ名僧多シ 維新前ニシユンサウ(中西ノ人)アリテ寺社奉行トシテ天下ヲ遍歴シ 遂ニ高野ニ住ス

一 本願坊

密宗ニシテ本尊大日如来寛永中ノ官記ニ別當ノ屬坊ニシテ諸殿ノ論及ビ鐘撞ヲ司ルト見ヘタリ 享保中ノ官記ニ境地ノ畝数二十八歩トアリ 寛永元年八月本庄村八幡社ヲ龜ヶ岡ヨリ移轉ニツキ前時本尊大日ノ模像ヲ以テ該社地ニ本願坊ヲ設置サレコノ創立ニ際シテハ大檀那監物兼友大イニ儘力シタリキ 明治維新ノ際神佛御取別ノ官命ニ因テ堂坊ハ清潮寺ト共ニ萬勝寺ヘ合併サレタリ

一 麿彌勒寺

上組ノ西北隅ノ高嶺ニシテ頂上ハ塩屋村境ニシテ古松一株アリ 東ヘヨリタル所ニ池三ヶ所アリ 中ノ池ノ辺ニ寺家ノ廢跡アリ下ノ池ヲ蓮池ト稱ス 中ノ池ハ救生地ト言フ

一 野神ノ松

清水薬師堂前半町許東南ニシテ小祠アリ 此ノ祠ハ此ノ地ニ昔佛院ノ旧跡ナルニヤ堂ノ前ト言フ 又東ノ方ヲ神田ト言フ

一 金剛坊

町ノ東部ニシテ葛原山正福寺旧跡南ノ山手ヲ言フ 名義事跡詳ナラズ

一 堂屋敷

町ノ北部長谷ノ北ニシテ一筋ノ谷也

谷中ニ小高キ平地方二十間許寺家ノ廢跡アリ
ソノ寺号ヲ失ヒ詳ナラズ

一 麿千手坊

薬師近境ニアリ(正福寺)清壽庵ヲ言フナリ

一・名流

榎本利男

源義家ノ子孫ト稱ス。系圖アリシガ失シテ傳ラズ。傳ヘテ言フ、義家ノ子孫某、戦国以前ナラン、上本庄ノ地ニ来リ榎ノ側ニ家ヲ建テ以テ榎本氏ヲ稱シ附近ノ地ヲ開拓ス。子孫總政所役及ビ組頭役庄屋ヲ勤メシコト前ニ延ベシガ如シ。後役ヲ止メテ河内ニ移ル。今ヨリ約百五十年前ナリ。

江本亮介

山本勘介ノ子孫ト稱ス。後江本ヲ名乗ル。徳川ノ初期日光山修築ノ際兵助ト言フ者アリ。コノ地ニ行キテ修築ニ盡力セシガ、遂ニ彼ノ地ニ病死セリ。維新ノ頃ヨリ力太郎出ヅ。漢學ニ頗ル深ク又書ヲ良クシ、阿萬ノ文化ニ大ナル貢獻ヲナセリ。

谷口源太郎

人皇六十八代三条天皇ノ三男三条秋元丸ニ出ヅ。子孫秋元ヲ稱セシガ、九代ニシテ甚市郎アリ。父忠宗及ビ兄幸太夫ハ天正十年八月豊臣勢ト戦ヒ中留川ニ討死ス。コノ時甚市郎ハ中留川樋ノ中ニ隠レテ死ヲ免レシカバ改姓シテ樋口ト稱シ浪人トナリテ淡路ヘ渡リ鮎屋村瀧ノ下ニ居住シ、父兄ノ菩提ヲ修ス。其子甚太郎元近ニ至リ阿萬西村ニ移住シ、子孫谷口ヲ稱ス。

谷口家系圖抜粹

初 祖 人皇六十八代三条天皇ノ御三男長和元年七月卯ノ刻誕生御名三条秋元丸ト号ス。

行年九十八才卒 天永元年六月五日 遠離院殿夏月條安隨法佛頽大居士

二 代

秋元三位中将忠重 行年百十八才卒 唯頽院殿法山乃智尊光誓言大居士 元久二・六・五

三 代

秋元中納言忠行 治承元年三月隕孛 那賀郡櫛淵村ニ来リ城ヲ築ク永ク萬歳樂

行年九十八才卒 弘安三年六月四日 讀誦院殿本預佛道法泉筥應大居士 弘安三・六・四

四 代

秋元伊賀守忠一 行年百八才卒 見蓮院殿我光性安法歳住庇大居士 元徳 二・六・六

五 代

秋元紀伊守忠政 行年百一才卒 正念院殿筥是刀秀唯○於返大居士 應永一六・六・五

六 代

秋元紀伊守忠次 行年八十九才卒 說是院殿佛教発○如等行眞大居士 文明二・六・二八

七 代

秋元讚岐守忠森 行年九十五才卒 是諸院殿尊光儀山筥應徳安大居士 永正一七・六・五

八 代

秋元紀伊守忠重 行年八十一才卒 解説院法修正圓儀尊住於大居士 天政 五・六・三

九代 秋元紀伊守忠宗 三十七才の時天正十年八月二十三日ヨリ豊臣勢ト廿八日迄戦交
遠雖防戦不能嫡男幸太夫ト父子中留川ニ於テ討死ス。二男甚一郎中留川樋ノ中ニ隠ル、漸
ク死ヲ免レ、其由ヲ以テ姓ヲ樋口ト改、浪人トナリ隠居ヲ遁レ淡路へ渡リ、鮎屋村瀧ノ下
ニ蟄居ス。父兄ノ菩提ヲ此処ニ修シ後ヲ此処ニ終ル。

秋山院殿輪阿徳法淡入大居士

天正一〇年八・二八

秋元幸太夫忠行 二十一才卒

廣宣院殿淡到阿見一心大居士

十代

樋口甚市郎元近 阿萬西村ニ住居ス。田地田畑ヲ開発ス行年六十一才卒 篁佛院山説是居士

十一代

萬治二・二・二

樋口甚市郎元住 父ノ跡ヲ継キ田畑開発ヲ業トナシ年々阿波へ歸リ城跡へ到リ先祖ノ石碑
行禮ヲナシケリ。行年九十一才卒 佛敎院柳山道喜居士 貞享三・正・晦

十二代

樋口五郎左エ門元重 我大祖先ヨリ系圖大破ニ及ビ元禄七年九月十五日之ヲ改メ書記ス。

光現院儀山頓入居士

享保二一・六・二八

十三代

樋口五郎左エ門 夏月院儀山辨入居士

宝曆元・六・二五

右十三代迄ノ系圖ハ明治十三年本家谷口米八家再建ノ際棟ニ納附シアルヲ得テ更ニ記ス者也。

別家 谷口倉吉 以下ハ過去帳ニ於テ系圖書替ノ節載之

安宅氏

宇多天皇ノ子孫ニシテ詳細ナル系圖存ス。宇多天皇ノ御孫雅信ト云ヘル人源姓ヲ賜リテ後六代目ニ經方ト云ヘル人始メテ佐々木ト称ス。更ニ御三代目ニ秀信、安宅ト号シテ淡路ノ国大土居ニ城ヲ造リ、更ニ又炬ノ口城ヲモ築キタリ。之ヲ安宅ノ祖トナス。爾來諸度ノ合戦ニ参加ヲナシ功アリ。主ヨリ賞ヲ賜フ。後十九代ニシテ吉門（甚太郎）アリ故アリテ阿萬浦ニ蟄居シ大工ヲ職トス。子孫代々安宅氏ヲ称シ上本庄ニ居住ス。

安宅氏系圖拔萃

人皇五十九代宇多天皇（号亨子院号寛平法皇）光孝天皇第三皇子母皇右班子女皇二品式部郷仲野親王女仁和三年即位御宇十年承平元年七月十五日崩御御壽六十五才——敦実親王（一品式部郷）——雅信（正三位左大臣）始源氏姓賜之——扶義（正三位中将）中宮大夫——成頼（從五位下近江守左近將監）紋四目結始成弓馬家——成経（從五位源大夫）——經方（佐々木源大夫）住近江國始号佐々木——季定從五位下（佐々木家祖秀義父也）——為俊（佐々木源二郎（右京亮）紋不疊四目結——季綱（佐々木大良三良）右京大夫——季信（安宅撰津守）始改姓号安宅（定紋丸内梅八添紋丸内三蓋松馬印幕紋弁竹）母源信近女久壽元年生元暦元年源平合戦之時一谷屋島壇浦有軍功就中屋島之戰場平家大将與教盛戰大顯名譽、文久元年右大将頼朝総追使、同年一族佐々木二良中務丞經高依台命阿波淡路土佐三箇守護職此時秀信

隨從經高趣于阿波國、同国安宅庄領二百町同三年依命於淡路國築大土居、同四年同國築炬口城郭屋秀信居住元曆年中屋島壇浦合戰之時信國採筆讚岐二宮之額刀一腰奉納承久三辛巳年三月二十一日卒法名芳樹寺殿覺慶宗源大禪定門——秀且（安宅太郎）左衛門尉（母菅原定英女文治五年生承久元年正月神田治部少輔和睦古元曆元年合戰之砌秀且幼稚也。然源氏成勝軍依之二ノ宮奉納者比一人為一人故治部少輔ヨリ貴米三斗當城江送来孔安入二酉年九月十五日卒享年九十七歲法名高照寺殿秀月宗禎大禪門——秀許（安宅太良三郎）——（母當國土岐源國賴女承久元年三月朔日生弘安八酉年十二月廿三日卒享齡六十七歲法名光赦寺殿雪林了白禪定門——秀定（安宅太良兵衛）監物（母津志源大良直家女仁治元子年生嘉元二甲辰年六月三日卒享齡六十五歲法名高雲寺殿自覺良薰禪定門——光義（安宅監物）河内守 母當國野口氏女光重孫永重女也文永三丙寅年十月十三日光義生元弘元年辛未年十一月廿七日卒法名相応寺殿巖雪了諦禪定門——秀證（安宅三良始名信吉）——（母當國安田民部女正應四年辛卯四月二日生貞和二丙戌年三月十九日卒法名光照寺殿春岳了裕大禪定門——秀德（安宅彦太郎監物）——人皇九十六代光嚴院正慶元年四月父信吉（後改秀證）去當城行楠家屢有戰功而歸城其後曆應三年三月依足利將軍尊氏公之命細川師氏淡州征伐之砌信吉從之當城居住前正慶元壬申年六月三日秀德生成長之後奉仕細川賴之盡忠功畢永和三丁巳年九月五日卒法名大雲院自得淨榮大居士——秀鎮（安宅左近大夫）監物 母雜賀市左衛門尉春直女觀應元年母雜賀氏女婿、同年九月廿八日秀鎮生應永廿一甲午年九月七日卒享齡七十五歲法名誠正院穠光

淨雲居士——秀信（安宅太良左衛門尉）紀伊守——母在田權之丞秀治女応安二巳酉年二月三日生室嶋田氏女至德三寅年七月婚姻生一女子無男子故阿波德永宗則三男以宗治為胤嗣宗治名改秀治秀信文安五年七月八日卒法名歸光院殿心覺淨清居士——秀治（始德三郎宗治改之）安宅紀伊守実阿波國德永宗則三男也、秀信為○子改秀治家督相嗣応永元戌年九月入家同廿五年大内義國遮留鳴戸 秀治寛正六年八月七日卒享齡七十一歲同九月十七日葬千光寺——秀長（安宅太良二良）和泉守 母當國伴信頼二女永享三亥年二月十五日生長享二甲年三月○五日卒享齡五十八歲法名慈照院殿椎山全融大居士

当代永享三年管領細川勝元詣千光寺止宿於當城——高章（安宅太良三良）監物 母千葉二良貞國女長祿二戌寅年正月七日生享祿元戌子年九月十七日卒享齡七十一歲法名宝樹寺殿光曜自運大禪定門——秀行（安宅市良）左工門尉 母當野口委直女。文明十一巳亥年四月十五日生。享祿二巳丑年九月五日卒。法名光輝院良月義融禪定門禪位儀——秀興（安宅太良始名秀伸）監物 母當國福良三良高直女。文明十八午年婚。明應六年秀興生。文龜三年娶龜井太良左衛門包氏之女。生五男一女、帝君賜正之字同年有子細止正之字。天下大飢許領内之貢。使民家助成。從永正五年以後、海内不穩乱謀者多矣。將軍義植公。近江國觀音寺戰亡。同十六年三好家當國中軍軍銀催促。此時千光寺困窮。地頭秀興所及相談。秀興曰、此鐘建立。先祖秀證父。以發願成就然今當寺賣重宝之鐘。非本意。當寺秀興。新可寄附。依之當家軍用銀三好相渡。時其鐘之銘曰、當國一乱之時。此鐘可下賣定畢。爰秀興買留奉寄附也。永正十六巳卯

六月十五日 永祿十六巳年九月十日卒。法名英照院仁宏義秀居士——秀照 母龜井太良左工門包氏女、永正元子年四月八日生 大永元年細川高國。摂州尼ヶ崎築城郭雖招秀照不應。同三年義晴公。阿波江御弑駕。秀照併奉。同五年當國墓浦城主藤次隆利隨從義澄。再応雖招秀照不応。故同八年戊子正月二十日人数以二千人當城江押寄。當城日根權藏信光 粉骨碎身雖為苦戰。敵多勢味方無勢不叶。捨城福良江引取。同年同月年号改享祿。此時日根權藏小兒高仲俱趣于讚州長尾城寓居。後移住坂田城。同二年高仲行美濃而隨從木下秀吉。成績下。後讚州觀音寺城本城主。有子細姓改高坂。天文廿一年七月十三日卒法名大俊院秋光義山居士——秀連（安宅三郎）勘解由 母安宅重正女。天文十八年五月十八日生。永祿八年依台命京都出陣。同三ヶ月歸陣。天正五年阿波勝瑞出陣。同九月五日同國矢埜村一宮長門守合戰盡軍功終討死 法名了嚴院好月善照居士——正連（安宅二良三郎）民部少輔 母佐伯正国女。永祿九年三月十九日生。天正六戊寅年三月吉辰日。當家系図以旧記改記之。臣淺田宅之進探毫。同十年當家零落。三原郡阿萬浦蟄居。俟開運之時者也——正吉（太郎三郎 天正十壬午十二月四日卒）——三男 吉門（甚太郎）當家家紋梅八。添紋丸内三蓋松。 馬印幕紋并竹両。先年有故蟄居於阿萬浦而營大工職。其後文祿元年豐臣太閤秀吉公依朝鮮御陣蒙公命作陳屋繩張。時以自先祖為武士同諸軍。渡彼地而忠勤粉骨。有顯軍功得勝利之事。歸国後被命宜復從來之武士以勤仕也。然辞退之。請還住阿萬。安意于工匠者及再三。公許可之且見任福良郷阿萬浦灘生石三郷棟梁職。由之称古來御用大工。蒙諸役御免三箇棟梁職台命則賜一刀營以前職

業之條。子々孫々能知之秘藏拜領之一柄。可以永代精勤家職者也。

文祿元年壬辰七月吉日 安宅甚太郎 同年八月改名藤原孫一郎

当年惣領九左エ門八歳也 母者釜口城主三澤駿河女 早瀬

慶長十二丁未七月十九日卒 甚太郎事孫一郎 妻早瀬慶長十五戌九月廿四日死

家次（九左衛門） 宗慶禪定門 承應三年七月二日卒

家正（勘左衛門） 宗仙禪定門 寛文十三丑七月廿四日卒

長太夫（佐野別家 武左衛門） 林證禪定門 元祿二年巳四月廿七日卒

勘左衛門 真覚快善信士 元文五申二月十四日卒

勘左衛門（別家 久左エ門） 諦法知観信士 宝曆八寅十二月二十二日卒

所 平 詣宝常遊信士 文化十三子閏八月六日卒

良道（勘左衛門） 猶覺義諦信士 弘化四未九月二十七日卒

道安（九左衛門） 安楽院遊本道歸居士 元治元子九月六日卒

道吉（勘左衛門） 甚太郎 重太郎 久

山岡仙太郎

其祖先京都ヨリ落来ルト云フ。系図存セシガ或戰ニ出陣ヲ厭ヒテ、大阪役後之ヲ燒棄テタリト言フ。大阪ノ役ニ召方ノ奉行ヨリ呼出サレテ之ニ参加セシガ其節ニ用ヒタル蒸桶（榎ノ木ニテ製ス）今ニ存ス。桶ノ口径二尺余、底径一尺五寸許高サ約二尺ナリ。

阿部定之

新系図ニ清和天皇十六代後胤山城々主阿部大和守安永ニ出ツトアリ。元古キ系図アリシガ、隣家ニ預ケアリシ間ニ火災ノ為焼失シタリト云フ。

何代カノ後阿部貳日大夫政吉アリ三好長治ニ属セシガ主家土佐ノ長曾我部元親ト戦フ節、敵將尾勝源内正宗人トテ勇猛ノ士ヲ討取り主君三好長治ヨリ感状ヲ賜リ、太刀及緋綴ノ甲冑ヲ賜フ。其後修理太夫ノ後阿部樫右衛門、全源藤治定永ハ天正十四年此処ニ浪人トナリ阿州板野郡江尻ニ住ス。源藤治末葉ノ彦衛息吉右衛門、彦右衛門、弥次衛、甚衛、長助ハ慶長五年江尻村ヨリ淡州湊浦ニ来リ七ケ年住居ノ後弥次衛ハ阿州へ歸リ、他四人及清助五人連ニテ吹上ニ来リ子孫繁栄スト。猶阿部定永靈神社ハ大正四年定之氏後丘ニ祠ラル。傳來ノ槍穂先アリ。

榎本弥一郎

系図ニ楠木正成ノ子孫トアリ。正行ノ子正澄當地ニ来リ榎ノ根本ニ住ス。世ヲ忍ビ姓氏ヲ隠シ橋ヲ立花トス。里人ハ榎ノ本ニ住スルヲ以テ榎本殿ト呼ブ。正延ヨリ榎本氏ヲ称ス。

榎本氏系図抜萃

人王三十一代敏達天皇第四王子葛城王天平八年子十二月始賜橋姓加臣列為井出左大臣、号正一位橋朝臣諸兄天平宝字元年正月乙卯薨——正玄 楠多門兵衛河内判官——正成 和河撰三州ノ大守タリ。延元元年南朝ノ建武三年子五月廿五日撰津湊河而戦死、法号靈光院殿大圓義龍大居士 正季同時ニ討死 法名見龍院仙岩大居士——正行 貞和五年南朝正平四年正月

五日四條繩手而高野武藏師直ガ為ニ戰死 法号外龍院殿道雲登山大居士 正義、正時（明德二年八月赤坂而死）正勝（同時ニ討死）——正澄 幼名時千代丸立花帶刀左エ門始正延後ニ正澄ト改ム。南朝ノ浪人也。貞和五年十二月乳母ニ隨行主從五人ニテ當海士浦ノ川邊、榎ノ大木ノ本ニ來リ足ヲ留メ住居トス。——正延幼名音壽縫之助同權左エ門——正齊（幼名綾太郎主計榎本權右エ門——正時 幼名千太郎 主計權太夫——正利 幼名松太郎主計太郎右衛門——常俊——正長——正久——久信——信利——彙藏——久藏——八藏——松藏——四良助——喜平——役藏——榮之助——多賀太

阿部新五郎

人皇三十六代孝德天皇ノ左大臣倉橋麿ヨリ出ツ。安倍貞任ハ倉橋麿十七代ノ子孫タリ。更ニ十代ニシテ頼衡、阿波江尻村ニ來リ住ス。忠敬ノ後系凶失シテ傳ハラズ。傳來ノ甲冑一揃、太刀二振、和泉守來金道、於武彘江府大和守安定ト銘アリ。又山城国文藤包重作槍アリ。

阿部氏系凶拔萃

人皇三十五代王孫倉橋麿（左大臣安倍朝臣始テ姓ヲ賜フ）——道守——明東——吉平——時親——有行——泰長——季弘——孝重——季尚——業氏——淳房——良康——淳宣——頼氏——忠頼——頼時（安倍大夫奥州六箇郡司リ八幡太郎義家ト連年之合戰ニ及 天喜五年金為時ガ為流矢ニ中リテ死）——貞任（厨川次郎太夫、奥州合戰ニ利無ク討死ス。）宗任（鳥海三郎太夫戰乱利無ク降參ス。八幡太郎義家殿ノ臣ニ屬シ後筑紫ニ下リ下松村松浦ニ住ス）

絶亡シ元親押領ニ依テ閑居ニ及ブ者也。淡路島三原郡阿萬浦閑居住ス。

道豊嫡女 トヨ 嫡男 安倍傳吉、源太郎

抑当村発端之事

阿波板野郡江尻村阿部樞右エ門、同源藤治定永末葉彦衛倅彦右エ門、弥次衛、甚衛、長助、吉右エ門兄弟五人連レニテ慶長五年淡路湊浦へ来リ七ヶ年湊浦二居申候共田畑無之愛聞繕申処國君南淡二新発土地有之ノ様相聞へ夫ヨリ右兄弟ノ内一人弥次衛阿部へ歸リ残り四人ハ湊二居申清助召連レテ當地へ来リ新開仕、同十一年ニ御檢地請候處六町九反余御高三十三石余、右五人ノ穴野山ヲ開立テ夫ヨリ追々繁榮仕延宝元年棟附調之節ハ家數二十七軒人数九十二人高百四十六石一升一合其文化二丑年棟附改ニハ家數九十軒人数五百三十人牛六十六疋、馬五疋、船六艘高二百六十七石六斗一升八合、右元祖五人ノ本家筋ハ右彦右エ門本家今ノ彦右エ門、甚衛本家今ノ兼松、吉右衛門本家今ノ伊助、右長助之本家綻相分不申候右四人阿部末孫也右一人清助殿ハ一向宗此本家ハ虎藏。

森川八郎

人皇九十五代後醍醐天皇御三男玉津丸ヨリ出ツ。六代目七郎太夫忠政一旦浪人トナリテ淡路へ渡リ天正十三年阿萬ニ住居セリ。

森川氏系図抜萃

初祖 人皇九十五代後醍醐天皇御三男玉津丸從三位中将任 鎮守府將軍藤原行家行年八十八

——則任——忠頼（十八才ニシテ父ト共ニ奥羽下家衛武衛ヲ亡シ寛治七歳美々守義綱ト共ニ出羽国悪賊ヲ討平ゲ其功ニ依賞ヲ賜ル）忠昌（安倍左衛門保元元年新院御頼アリ御味方奉仕戰場ニ討死ニ及ブ）——忠資（保元元歳六十二歳ニ而宮方エ御味方申奉功顕）——頼清（保元平治ノ乱ニ宮方ニ而戦功顕仁安二歳丁亥二月十五日清盛大相国太政大臣ニ任日々奢二長シ無道ナルヲ以テ伊勢国ニ閑居）——忠正（安部太郎後鳥羽天皇御味方奉申平家追討之惣大將源義経公ニ屬シ摂州一ノ谷ヨリ讃州八嶋合戦及長門国赤間関戦功顕頼朝公ヨリ御感ニ預也）——頼村（安部右衛尉 建久四年五月富士山御狩之時大鹿射取御感預リ建保元歳和田一族ヲ亡シ度々戦功ニ依テ御感状并太刀ヲ拜領ス。）——忠友（建保七歳頼朝公ノ長男実朝公鶴岡ニテ討レ賜公曉阿閑梨ヲ敵手トシテ長尾新六定景○岡ノ後面ヨリ押カケ阿閑梨ノ首ヲトル其時モ功顕者也）——忠任——忠宗——頼衡（元弘三年執権高時悪逆ニ依リ足利家屬シ鎌倉ヲ責亡高氏公將軍ニ任細川頼春四国管領任ス依而延元三歳八月渡海ス板東郡江尻ニ住地ヲ定メ三拾貫領ス。）——忠勝——長頼（細川家ニ屬シ勤功有リ）——忠敬

添書之文

抑此一巻者人皇三十五代孝徳天皇孫流倉橋鷹ヨリ代々系圖シ子孫長ク安倍姓ヲ知ラシメ持傳ヘン事ヲ思フ所也。然ルニ文龜天正頃迄戦乱所々ニ打續キ書述ル間無依之添書シテ其文ヲ印置ス也 安倍源左衛門尉道豊

細川家絶亡之後者三好家ニ屬忠勤之所天正之頃土州大敵長曾我部元親寄来リ此カ為三好家

御守刀助宗鍛ス

明德元曆八・廿八卒

見蓮院殿長安儀光明応大居士

二世祖 森川伊豫守藤原光政 行年七十九 大安三・八・二一卒大徳院殿教榮雲才明安大居士

三世祖 森川紀伊守藤原義家 行年八十九 文龜三・六・二三・ 寛仙院殿歸安儀清大居士

四世祖 森川佐馬守藤原清重 行年七十五 天文一二・九・一〇 蓮照院殿秋月儀光大居士

五世祖 森川左近之助藤原行忠 行年七十 元龜二・一〇・二八 秀徳院殿○誉光蓮大居士

六世祖 森川七郎大夫忠政 行年三十九 慶長九・二・一七 觀光院止山性応居士

一旦浪人トナリテ淡路へ渡ル炬口城主安宅姓末裔ヲ〇〇(不明)来ル。都志〇〇(不明)三

年ノ後天正十三年阿萬住居

七世祖 森川清吾太夫政家 行年七十八 萬治二・八・二八卒 貞教院歸山蓮雲居士

戸樞加賀守次男此家宥坊養子ニ来リ十五年ノ間養育シテ樂隠居 法名蓮雲号

八 代目 森川八郎大夫家近 行年八十五 享保八・八・一五卒 寛月殿證珍紫雲居士

鼠食大破ニ及改

九 代 重 師 五大夫ト称ス。 享保一七・子三・八卒 法名行寂圓良信士

十 代 重 宗 清左衛門ト称ス。 宝曆二・一・二二卒 法名法光院正門居士

十一代 清 吉 明和九辰・八・二一卒 法名 秋月智除信士

十二代 惣 八 享和三亥六・一一卒 法名 風搖澤蓮信士

十三代 市兵衛 天保一三寅・八・二九卒 法名 歸本道光信士

十四代 法 近 惣八ト称ス。幼名要藏、宮本勘左衛門三男養子

正 仲 森崎宗吉ト称ス。明治二巳年六・一三卒行年二十四才法名紫雲惠生信士

安政六未年十二月廿二日右宗吉十四才ノ時。国君ヨリ農兵役ヲ蒙リ、則苗字帶刀被仰付、
文久二戌京都御守衛蒙リ上京、其後慶応三年三月兵庫港御固仰付罷越相勤七月歸宅

玉津丸御屋敷之事

京都三条通表御門粟田口清林宮。御心願所者東山清水ノ辺小林寺

屋敷裏大町之事

森川豊前守忠政所持之大刀裏ノ古跡ニ納有之、古系圖モ同断納。又京都玉津丸様・御墓所
土石共少許請歸納有之候事。(系圖ハ此度九代目ヨリ当代迄一時ニ記之者也。明治四未年
正月吉日 十四代目惣八誌之)

一、傳説・古蹟

小倉ノ池

河内谷ノ中ナリ。此辺源平合戦ノ時平氏ノ落人多ク潜ミ居タリト言ヒ傳フ。近年此ノ辺リヲ
掘リタルニ土中ヨリ土器ノ類或ハ太刀ノ朽チタルモノノ類ヲ夥シク掘リ出シタリ。又此附近
ニ業畑ト云フ所アリ。コ、ニ右ノ落人潜ミ居タリシモ終ニ糧食盡キテ餓死シタリ。故ニコノ
名アリト云ヒ傳フ。

猿神ノ森

大歳神社ノ東ニアリ。里人昔ヨリ云ヒ傳フ。昔上組ノ或狩人アリ。弓持テバ近郷ニテ名代ナリシガ、或日狩ニ出デ一匹ノ猿ニ遭ヒ、弓ヲ向ケシニ猿膝間敷キテ自ラソノ腹ヲ教ヘ指ザシ両手ヲ合ハセ、妊娠ノ身ナレバ死ヲ免レン事ヲ乞ヒタリシガ、狩人之ヲウチタリ。時ヲ經ズシテ不吉ナル事多ク出来セシカバ、即チ猿ノ祟リナリトシ、森ヲ造リテカノ猿ヲ祀リタリト。士邸ノ廢跡

才ノ鼻天王森西三十米許ノ所ニアリ、方十米許ノ小高キ場所ヲ言フ。人傳ヘテ云フ、明和ノ昔大ナル刀鎗ノ類ヲ掘出シタル事アリト言フ。又先年畑地ニナサントテ或人其場所ヲ掘開カントセシニ、其ノ者直チニ疾病ヲ得テ其場ニ死セリト。祟リナリト云ヒ傳ヘラル。

柵田第池

大歳大明神西北二〇〇米程ノ所ニアリ。元禄ノ頃、古郷殿城々主郷殿ノ末葉柵田善大夫久長ト云フ浪士ノ邸地ニシテ其廢跡畝歩一段歩許リナリ。

卯ノ日塚

才ノ鼻天王祠ノ南方ノ小サキ五米方程ノ塚ヲ云フ。人傳ヘテ云フ。昔ヨリ當地方ニ於テ五月端午ノ佳節ニ牛馬鋤鍬ノ類ヲ使ヒナバ其年ハ日照リツゞキ稲育タズトノ傳ヘアリタリ。然ルニ或人コレヲ笑ヒ、故意ニ其日牛馬鋤鍬ヲ使用シタルヲ以テ里人等大イニ怒リ、其塚ノ場所ニ穴ヲ掘リ生キナガラニシテ地中ニ埋メ、以後ノミセシメトシタリト。コノ場所ヲ云フ。

牛蹄石築ノ石

コ、ノ石ハ才ノ鼻ノ道端ニシテ大松ノ南ニアリ。牛ノ蹄ノ跡及長刀ノ石築ノ跡アル大石アリ。郷丹後ノ守戦利アラズ城ヲ逃ル、時牛ニ跨リ山頂ヨリ飛降りタリ。其時ソノ場所ニアリシ石ニ蹄跡ト持居タル長刀ノ石突ガ岩ニ入り躓トナリテ今尚残レリト。

郷丹後ノ守力石

淡路草ニ昔郷殿力量勝レタレバ力ヲ試サント城上ヨリ大ナル石ヲ投ゲタルガ五十間程モ隔テ、此処ニ飛ビタリトアリ。コレ又才ノ鼻大松ノ北ニアリテ百貫余リアル大ナル石ナリ。郷殿部下ノ者共戦利少キ為、意氣ヲ鼓舞スル目的ヲ以テ、城ヨリ大石ヲ投ゲタルニ、其石大イニ飛ビ此処迄来リ部下ノ志氣大イニ揚リタリト云フ。

猿丸太夫ノ墓

中ノ河内ノ山中ニ隱士ノ古墳アリ。古ヨリ云ヒ傳ヘテ猿丸太夫ノ墓ナリト云フ。又猿丸太夫ノ腰掛石ト云ヒテ高サ三尺幅五尺平三尺程ノモノ灘村地野ニ行ク山中ニアリト云フ。

猶淡国通記ニモソノ事ノ由ヲ記シ見ヘタリ。紹運録ニ言フ。聖徳太子ノ御孫山背大兄子弓削王是猿丸太夫也ト。基箭曰又或系圖曰ク

用明天皇——聖徳太子——山背大兄子——弓削王（是猿丸太夫ノ事也）

又兩書共ニ官姓時代等ハ之ヲ知ラズト言フ。

博物光仁帝父施基王之子也、世ニ天武帝ノ子ト言フ誤也。無名抄曰或人ノ言、田上近江之下ニ曾束ト称スル所在リ。其処ニ猿丸太夫ノ墓有リ。云々

扶桑隱逸傳曰猿丸太夫者深草郷ノ人也。今ニ至土人深草ヲ名ツケテ猿丸卿ト云フ。何代ノ人未詳。或曰元慶之間人也。或曰聖徳太子孫弓削王也。其然否ヲ知ル莫シ。後ニ江州曾東山中ニ隱ル。鴨長明方丈記曰、田上川ヲ涉ツテ猿丸太夫墓ヲ尋是也。猿丸和歌ヲ善クス。

古人曰ク、其奥山紅葉ノ歌ハ羽林ノ西對春夜ノ詠相ニ在リ。贊ニ曰ク。藤杜之間ニ後人因テ之ヲ名ル有耳。余故曾東山中ヲ尋ネ田上川ヲ過ギテ行ク事二里余。溪上ニ臨ミテ巖居之跡。幽趣悦可、却テ山中ニ入ル事一里許ニ猿丸祠有リ。此亦太夫遊所之地ニシテ村民ノ奉祠也。和漢三才圖會吝豐前鏡山ニ猿丸之墳有リ。万葉ニ「豊國の鏡の山の岩門とて隠れにけらし待てど来まさず」トアリ。

杖掘ノ井戸

東組中ノ河内ニアリ。浅クシテ小サキ井戸ナレドモ四時水ノ涸ル、事ナシト、傳ヘテ云フ。昔弘法大師諸国修行ノ節、コ、ニ来リ突然手ニセル珠数ヲ泥中ニ落シタリ、之ヲ洗ハントテ四方ヲ見タルモ水ナカリシカバ手ニシタル杖ニテ土地ヲ掘リ九字ヲ切りタルニ清水湧出デタリ。コノ水ニテ珠数ヲ洗ハレタリ。コノ井戸今ニ残り、杖掘ノ井戸トテ靈驗アリ。

亀ヶ岡

西組ニアリ。海面ヘ長ク出タル岡山ノ方三段許ノ平岡アリ。ソノ形亀ニ似タリ。傳説ニ昔現在ノ亀岡八幡ノ神像亀ニ乘リテ此浜ニ上リ給ヘリ。里人初メテ此丘ニ祝祀リタリ。後年上組ノ今ノ地ニ移シ祭リタルナリ。周リニ松アリ。毎年六月晦日ニハ神輿ヲ此所迄濱出シ居リシ

ニ現在之ヲ行ハズ、浜出シセシ時ハ毎々大亀浮キ上ル事例ナリト言フ。又八幡宮神幸ノ地ナルガ故ニ宮地路ト言フナリ。

本庄キバ

西組・東組境ノ浜辺ヲ言フ。或ハ言フ此ノ地ハ亀岡八幡宮御神幸ノ地ナルガ故ニ宮地路キバト言ヒ、神會ニハコ、ニ幸輿アリ。此時海面ニ亀浮ブ事恒例ナリト。又此海辺磯ハ往古神体亀ニ乘リテ上リタリトノ傳説モアリ。

江本氏ノ玉

昔武田音次郎不吉ナル事アリテ之ヲトセシニ、神ヲ信仰スルノ不足セル事知レタリ。故ニ八幡宮ノ周ノ石垣ヲ築カント念願シ四国ヨリ石工ヲ呼ビ、河内谷飛石ヨリ八枚敷ノ大石ヲ掘リ出シ、之ヲ切りシニ中ヨリ貝形ノ玉出デタリ。石工之ヲ四国ニ持歸リシニ不幸續キタレバ、音次郎弟江本廉藏之ヲ家ニ持歸リ傳フ。コノ玉屢々靈驗アリト言フ。

古穴

丸田せんぶり山ノ東南山腹ニアリ。幅約三尺深サ約二尺乃至三尺ニシテ長サ約一間半ナレド現在埋レル部分ヲ合スレバ長サ五間余ニ達スナリ。穴ノ上面ニ石ノ蓋アリ、最大ナルモノハ長徑四、五尺、短徑約三尺アリ。傳ヘテ云フ昔天ヨリ火ノ降りシ時人々此ノ穴ニ隠レシト云フ。按ズルニ穴居ノ跡ナルベシ。又一説ニハ古墳ナリトモ傳ヘラル。塩屋組ニモ同様ノモノアリ。

足踏石

東組山中土生街道ノ左ニ小堂アリ。堂中ニ石アリ。三尺亘リ白石ノ円形ナルアリ。コレニ小足跡アリ。傳説ニ弘法大師修行ノ途石上ヲ踏給ヘバ忽チ足跡ソノ石面ニ存レリト云フ。頂上ニ足跡アリ

お亀塚

昭和十二年八月十一日早朝西組浜渚ヨリ陸ニ這ヒ上リタル大亀アリ。甲羅ニ二個所ノ大傷アリテ喘ギ喘ギ今ニモ息絶エントスル様ニ里人多數出来リ之ヲイタハリ介抱ス。去ンヌル明治二十七年八月日清戦役当時モ潮崎ニ近キ大谷ニ、コレト同様ノ傷ヲ負ヒ陸ニ上リテ死シタル大亀アリテ里人ハ之ヲ埋メテ亀神社トテ常ニ詣ズル祠アリ。其後明治卅七年八月、日露交戦ノ當時殆ンド同ジ個所ニ再ビ前者ト同様ノ事アリタレバ、又之ヲ埋メテ祠ヲ建ツ。今又支那事変ノ勃発シテ正ニ酣ナラントスル時ニ際シ三度此珍事アリ。由来此地産土八幡大神ハ往古八月「大神乗神亀上于陸云々」等ナリ。又大神例祭ノ時神輿宮居ノ濱ヘ神事シ給ヘバ、不思議ニモ沖ニ大亀ノ浮ブ故事アル等、亀ニ縁深ケレバ、息絶エタル亀ヲ西組在郷軍人ヲ中心ニ其処ニ埋メ祠ヲ建テ、称シテお亀塚トイフ。

古刀ノコハレ

汐後濱ヨリ四百五十米、海ヨリ二十米ノ高地、數千年前海賊ノ住居ノアリシトノ傳説アリ。其処ヨリ時々刀ノ破片等掘出サル。

經塚

町ノ南、九腹（サンマ）ヶ谷ト言フ所、河内川筋ノ傍ニアリ。南方ニ亘リ三尺許リノ穴アリ。塚ノ中ニ四方ヲ疊ミ、廣サ八疊許アリ、又南エ一段高キ屋敷跡アリ。

榎本氏事績

本庄下組ノ郷士ニシテ榎本氏某（通称當時民左衛門）其ノ先祖ハ三好修理大夫存（有）保ノ家臣ナリキト傳フ。一振ノ名刀ヲ傳持ス。此ノ名刀此ノ家ニ事アル時ハソノ刀身ニ汗ヲ出スト言ヒ傳フ。其銘滅シテ一字幽ニ存ス。

妖火

古、上組ニオ薦ト云フ娘アリ。年頃ニテ中西某家ニ女中奉公シタリ。後年オ薦十八才ノ時主人ノ子ヲ妊娠シタリシガ、主人ハ之ヲ省ミザリキ。タマタマ主人ノ金子大枚紛失セリ。主人ハ日々オ薦ヲ私刑ニシタリ。余リノ事ニオ薦ハコノ無実ノ罪ヲ晴サントシテ得ズ終ニ恨ミヲ吞ミ、主人ノ家ノ木ニテ（いぶキノ木）縊死セリ。死体ハ上組ニ歸シ下本庄九原ニ埋メタリ。ソレヨリ毎晩九原ニ妖火出デ、道ヲ傳ヒテ中西ニ至リ、いぶキノ上ヲ數回廻リ後ソノ家ニ入り後又出デ、九原ニ歸ルト云フ。其形、大キサ提灯ノ如クニシテ光ナシト言ヒ傳フ。近世ハ其怨火ノ顯ハル、事稀ナリト言フ。其ノいぶキハ寺ニアリ。

女子谷

小谷ニかじ谷ト云フアリ。火立山ノ北左右ニシテ蛇穴アリ。傳説ニ往古大蛇鳴門ヨリ此穴ニ

通ヘリト也。又昔吹上長尾山金剛寺ニ光信ト言フ僧アリ。光信ハ一人暮シニシテ一匹ノ真黒キカラス猫ヲ飼養シ居タリ。光信故アリテ金剛寺ヲ去ルニ當リ猫ヲ呼ビテ良久将来ヲ戒メテ女子谷ニ放チタリ。コノ猫常ニ蛇穴ニ住スト。暗キ夜等、猫ノ眼玉光リテ電光ノ如シト傳フ。時々里ニ出来ルモ人ニ害セズ、大キサ約十四五貫位アリタリト云フ。現在行方不明ナリ。

龍ヶ巖ノ龍頭

小浦ノ西龍ヶ巖ノ西南向上ノ石ニ鳴門ニ向ヒ龍頭狀ノ石アリ。コノ龍ノ口ヨリ何程日照リツゞクトモ常ニ清水湧出ズトイフ。

往古ノ山論

今ヨリ約三百年以前阿萬ノ頭庄屋榎本重左衛門ハ北阿萬村頭庄屋某ト奥山ノ境ヲ定メタリキ。兩入約シタル事ニハ明朝鷄鳴ヲ聞キテ出發シ、而シテ二人ノ出會ヒシ所ヲ以テ境トスル事トシタリ。然ルニ阿萬ノ庄屋重左衛門ハ一考シ何トカシテ自分ノ地ヲ広クセント考ヘ、前ノ晚ヨリ牛ニ乘リテ出發シタリ。(足不具ナルヲ以テ馬又ハ牛、杖ヲソノ筋ヨリ許サレ居タリ。(御用先馬杖ノ許可) 一夜ヲ徹シテ歩ミ、東組ヲ經テ奥山ヲ歩ム。曉ニ至リ北阿萬庄屋某ト相會シタリ。然レドモ北阿萬庄屋己ガ地域ノ狭キヲ察シ、重左衛門ノ牛ヲ押返サントシタリ。故ニ此ノ谷ノ名ヲせろ谷ト言フ(一名倉谷トイフ)ふるの谷ノ境ニアリ。カクシテ庄屋間ニ論議起リシガ、阿萬庄屋重左衛門ハ今朝出發シタルヲ裏書キスルハコノ辨当ナリ。コノ辨當ヲ見ヨト牛ノ腹ニツケアリシ辨當ヲ出シタルニ湯氣立ち居タリト北阿萬庄屋モ言葉ナク

ナリシト。カクシテ重左衛門今朝出發セシコト、ナリテ境トシタリト。

人物篇

一、江本力太郎氏

嘉永二年、上組江本長平氏長男トシテ生ル。幼ヨリ父ニ随ツテ學ヲ修メ、文久三年ヨリ上組前川馨夫氏ニ就キテ国典及漢籍ヲ、更ニ須本ニ出デ蜂須賀藩学校ニ於テ儒官太田融氏ヨリ漢文学ヲ習得スル外、専ラ自學自習シテ其蘊奥ヲ極ム。一旦農兵トナリテ洲本ニ出デシガ脚氣ノ為間モナク歸還、家塾ニ於テ専ラ子弟ノ教養ニカム。明治七年四月、阿萬小學校開設サルルヤ擧ゲラレテ職員トナリ、引ツゞキ明治四十三年一月迄約三十五年餘、孜々トシテ育英ノ業ニ從フ。コノ間七百有餘ノ生徒ヲ教養シ、社会ヲ善導ス。退職後ハ悠々自適、漢學ニ和歌俳句雜俳ニ親シム一方昭和六年永眠サル、迄後進ノ指導ヲ續ケラル。現在阿萬町ニ於ケル中堅人物ニシテ、氏ノ教ヲ受ケ居ラザルモノ殆ンドナク、又門人ニシテ郷里ヲ出デ、各其業ニ成功シツ、アル者年々其數ヲ増加セル状態ナリ。大正九年四月門人ニヨリテ大師山ニ育英記念碑建設サル。碑文ニ

我師江本先生は蓋 南淡の村夫子にして長く阿萬校に吾人多數の子弟を薰陶されたるのみならず、齡満ちて退隱の後も猶後進の指導を絶たず、実に阿萬村文化の向上に對しては維新前後を通じて貢獻されたる中心の師也 現今村内各方面の中堅たる者殆んど先生の指導

教育を受けざるなく、又郷関の外師の門を出で、各志す所に成功しつゝ、ある者年々其數を増加し来る。是を以て師の実に阿萬村文化の大源泉の一なりとなすべきは普く村内外の認むる所也。茲に先生齡七十有一に達せらる。即ち子弟七百餘名。村内大師山の地を相し建碑をなし永く先生の成徳を後昆に傳へんと云爾。

大正九年四月

門下生一同

トアリ。

一 蔭山品次氏

明治十年 澤吉氏長男トシテ上組ニ生ル。三原高等卒業後 暫ク村役場ニ書記トシテ勤務セシガ其後志ヲ立テ、稅務入署試験ヲ受ケテ合格、西宮稅務署ニ入ル。ソノ間元藏相阪谷芳郎男ニ認メラレ、大正末年、同氏ニ從ツテ支那視察ヲナシ、歸朝後拔擢サレテ西宮稅務署長トシテ八ケ年勤務サレ退職、後引キツゞキ輿望ヲ擔ヒテ昭和八年十二月西宮市長ニ舉ゲラル。昭和十二年十二月再選サレテ今日ニ至ル。

一 樋口季一郎氏

明治二十一年阿萬町上組奥浜久八氏長男ニ生レ、明治四十年叔父樋口勇次氏養子トナル。三原高等二年修了後、篠山鳳鳴義塾ニ学ビ、大阪地方幼年学校ヲ經テ東京中央幼年學校卒業、ツイデ陸軍士官學校、陸軍大学ヲ卒業、順次累進シテ昭和十二年八月陸軍少將ニ任ゼラル。ソノ間東京静岡名古屋等ニ參謀本部附トシテ或ハ參謀長トシテ快腕ヲ揮ヒ、又時ニハ外国ニ

派遣サル、等、明日ノ陸軍ヲ擔フ人トシテ部内ニ重キヲナス。現在某地ニ重要任務ヲ担当シツ、アル由ナリ。

一 木本勇二氏

明治二十九年岸上半蔵氏二男トシテ上組ニ生レ、明治四十二年木本その家へ養子トシテ入ル阿萬小學校卒業後十七才ニシテ志ヲ立テ、當時坂口定吉商店支配人藤平松二郎氏ヲ頼リテ上阪、坂口商店小役員ニ入ル。數年ニシテ番頭トナリ二十六才ニシテ一先ヅ主家ヲ出デ藤平松二郎氏及當時上阪セル上組前川逸雄氏ト合同シテ鉄商ヲ始ム。當時不況ニテ斯業界振ハズ、遂ニ大正十三年分散ノ已ムナキニ至ル。ソノ後鉄ノブローカーヲナシツ、解船業ニ着眼、小資本乍ラ堅実ニ着々ト營業ヲ續ケ、漸次擴張シテ相当ノ利益ヲ擧グルニ至リシガ、昭和五年頃或事情ニヨリ又々資産ノ殆ンドヲ失フニ至リシガ不屈不撓ノ同氏ハ、毫モ落膽スルコトナク小規模乍ラ解船業ヲ續行スル中、昭和八・九年頃ニ至リ再ビ隆盛ニ向ヒ、シャーリング工場、伸鉄所、プレス工場、解船工場等ノ開設、増設ヲナシ、重工業界ノ彗星的存在タリ。現在三会社、三工場ヲ宰シ、使用職工約一千ヲ算ス。

氏ハ一面、親ニ孝、兄弟親族ニ厚ク、殊ニ郷土各方面ニ對シ多大ナル寄附行為ヲナシ、時ニハ母ノ名義ニテ之ヲナシ老後ノ榮ヲ得シムル等、其斃レテ猶已マザル氣魄ト共ニ奇特ナル行為ハ一般推頌ノ的タリ。